蔵王町文化財調査報告書第１集

堀の内遺跡

１９９７年３月

蔵王町教育委員会

目　　次

第１章　遺跡の概要と周辺の遺跡 …… １
第２章　調査に至る経緯と調査方法 …… ４
第３章　発見された遺構と出土遺物 …… ８
　第１節　竪穴住居跡とその出土遺物 …… ８
　第２節　その他の出土遺物 …… ３９
第４章　考　　察 …… ４３
　第１節　出土遺物の考察 …… ４３
　第２節　竪穴住居跡の考察 …… ４７
まとめ …… ５１
引用・参考文献
写真図版

調　査　要　項

遺　跡　名　堀の内遺跡（ほりのうちいせき）宮城県遺跡地名表登載番号　０５０８４
所　在　地　宮城県刈田郡蔵王町大字円田字堀の内・字寺坂
調査原因　農道白山八堀線の改良工事に伴う事前調査
調査面積　約１，０００㎡
調査期間　１９９６年（平成８年）６月５日～８月２３日　（実働３９日間）
調査主体　蔵王町教育委員会
調査協力　宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員　宮城県教育庁文化財保護課……三好秀樹・高橋栄一・吉野　武・藤村博之
　　蔵王町教育委員会……佐藤洋一
作　業　員　我妻キヨエ・大庭千恵子・折居いと・会田康則・鹿島泰子・齋藤美代子・
　　平間由香利・神子田節子・村上和明・渡辺たみ

例　　言

1．本書は、農道白山八堀線の改良工事に先立つ、堀の内遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．本調査の結果については平成８年度及び９年度の宮城県遺跡発掘調査成果報告会において発表しているが、本書の記載内容がそれらに優先されるものである。

3．本書における土色の記述は「新版標準土色帳」（小山・竹原　１９７３）に基づいている。

4．本書における遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。

遺構配置図（第３図）…… １／３００
遺　　構 …… １／６０
土　　器 …… １／３
石　　器 …… ２／３

5．竪穴住居跡平面図の表記は以下のとおりである。

外形について、壁が残存している場合はその範囲と形状を実線にて表記した。また、壁が残存していない場合は、床面残存範囲を一点鎖線で、住居掘り方残存範囲を破線で表記した。

住居内の施設は、完掘状態における施設の上面と下面を表記した。

柱材・壁材・その他木材の痕跡・炉・焼け面・貼床の範囲は、それぞれスクリーントーンにして表現した。

6．出土遺物の朱彩・黒色処理・２次的な粘土の貼り付けについては、それぞれスクリーントーンにて表現した。

7．本書の執筆は佐藤洋一が行った。

8．本発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々から多大なるご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略、五十音順）

相澤　清利・阿部　博志・荒井　格・伊藤　博道・加藤　道男・菊地　逸夫・後藤　秀一・齋藤　彰弘・辻　秀人・藤沢　敦・古川　一明・真山　悟・村田　晃一・渡辺　清子

9．本発掘調査の出土遺物や記録、本書編集に関する資料は全て、蔵王町教育委員会が一括保管している。

第１章　遺跡の概要と周辺の遺跡

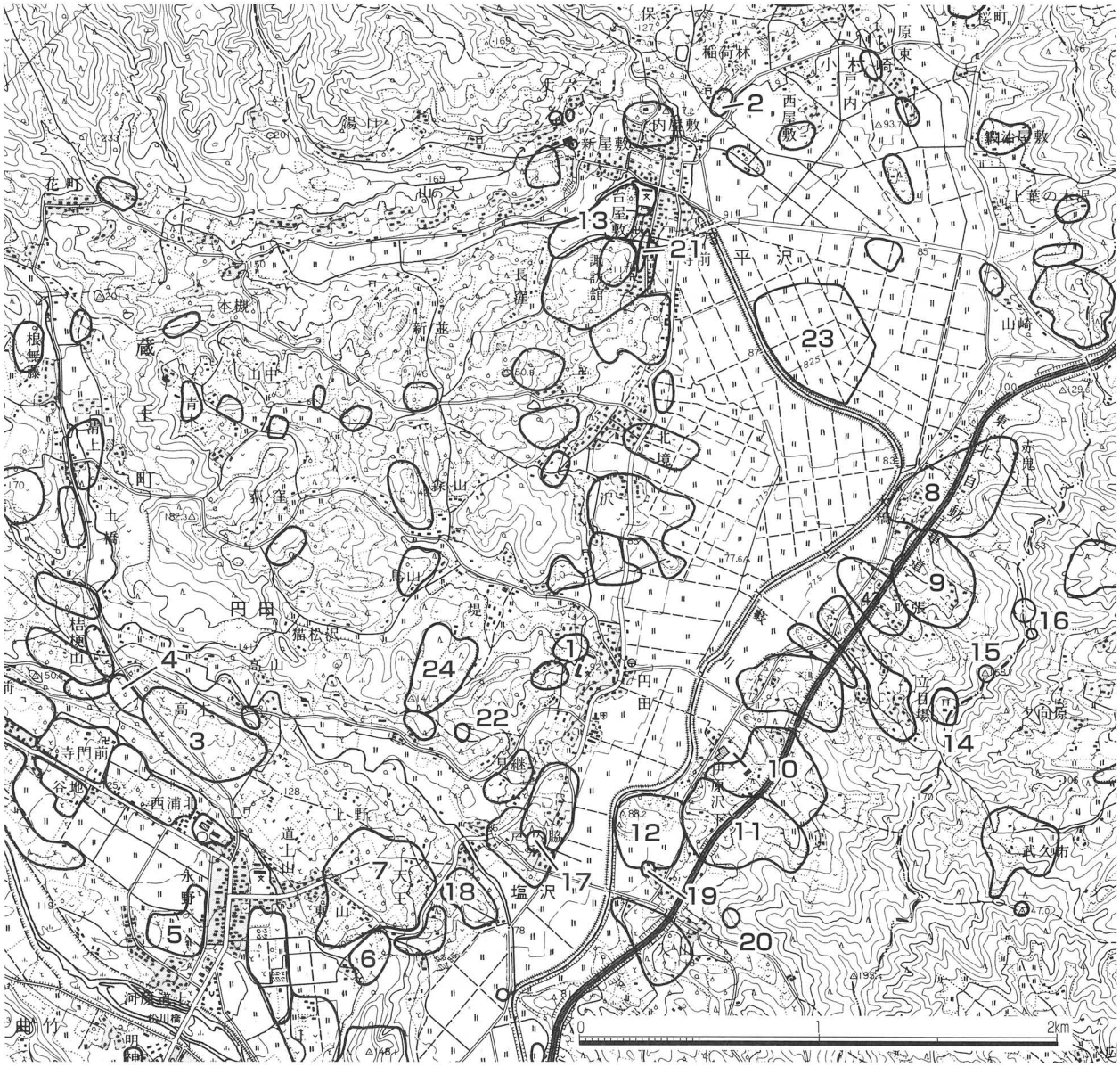
堀の内遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町円田字堀の内・字寺坂に所在する。

遺跡の所在する蔵王町は、奥羽山脈の南部を形成する蔵王連峰の東麓に位置している。町域の西部は標高約１，７００ｍの蔵王連峰から連なる高地、及びその麓部から連続した丘陵で、東に向かって徐々に標高を減じる。この丘陵は高木丘陵と呼ばれ、町域西部の大部分を占める。一方東部は、町域の北部から南に流れる藪川の沖積作用によって形成された、標高８０ｍほどの低地になっている。この低地は西を高木丘陵に、北及び東を愛宕山丘陵にかこまれ、盆地状の地形となっている。この盆地は円田盆地と呼ばれている。

本遺跡は、円田盆地西縁に接続する高木丘陵の端部、標高約１００ｍのゆるやかな北東斜面に立地している。

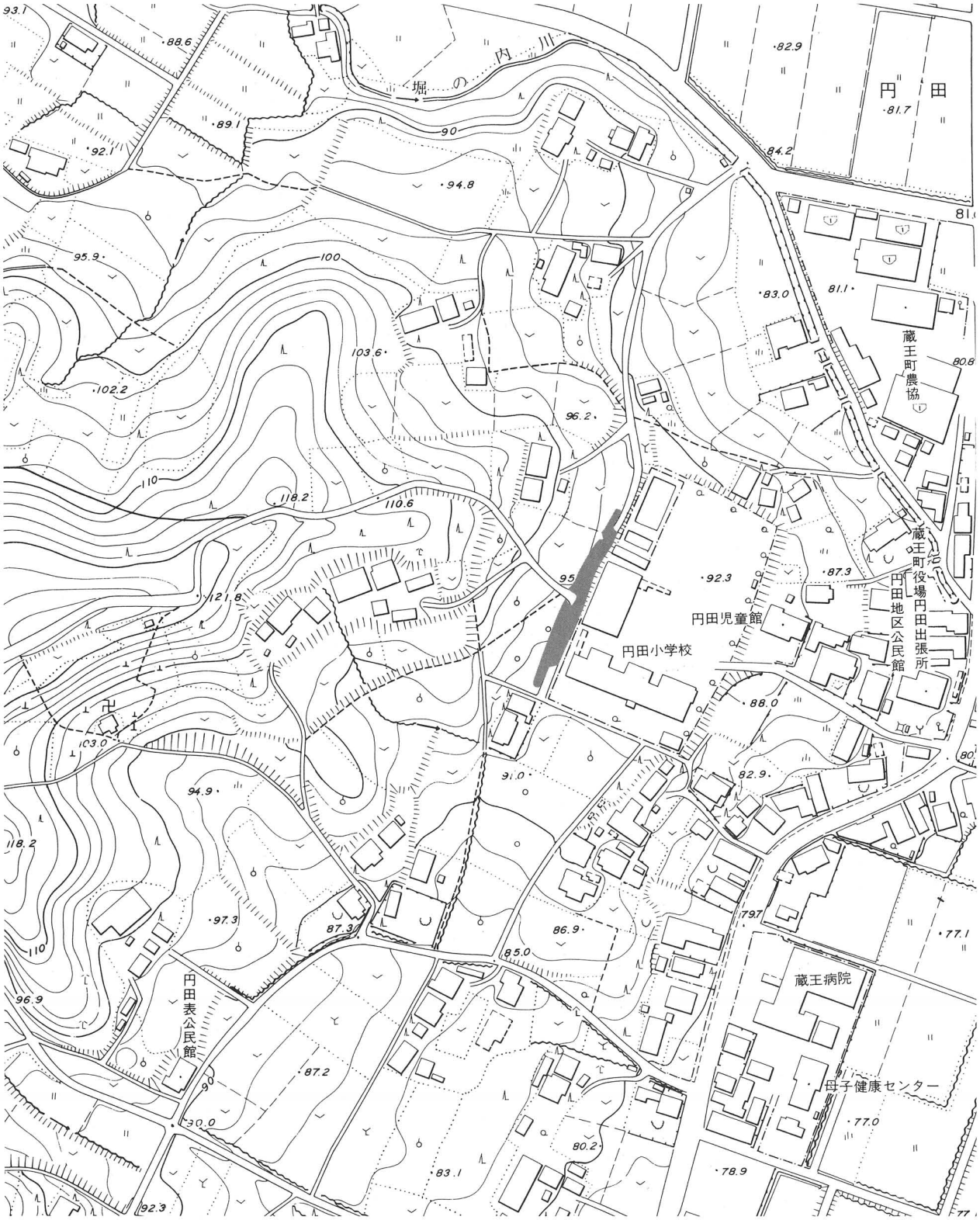
円田盆地周辺の丘陵端部は、旧石器代以降各時代の遺跡が数多く発見されており、この地が古くから人間の生活に好適な場所であったことがうかがえる。最も古い遺跡は盆地北西部の前戸内遺跡で、旧石器時代後期の柳葉形尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡は高木遺跡や湯坂山Ｂ遺跡など、高木丘陵頂部に立地するものが多い。弥生時代に入ると遺跡分布の中心が丘陵頂部から丘陵端部に移り、「円田式」標式遺跡である西浦遺跡をはじめとした多くの遺跡が認められる。このことは、それまでの森林地帯における狩猟採集を中心とした生活から、低地における農耕を中心とした生活へと生活形態が変化し、それに伴って生活適地も変化したものととらえることができる。古墳時代には、県南地方の古墳時代最初期段階の集落跡である大橋遺跡や台遺跡、諏訪館前遺跡などが盆地周縁部に数多く確認され、円田盆地を基盤とした生活圏が形成されていたことが推察される。愛宕山丘陵頂部には、愛宕遺跡、古峰神社古墳、夕向原古墳群などの前方後円墳が営まれ、高木丘陵にも宋膳堂古墳、天王古墳群など、埴輪を伴う古墳がいくつも残されている。古代以降の遺跡は都遺跡、下永向山遺跡、戸の内脇遺跡などがある。また、この地に、笹谷峠を越えて陸奥・出羽両国を結ぶ笹谷街道が整備されたのもこの時期であるとされる。中世以降、この地は戦略上の要衝地として多くの館が営まれた。当時の遺跡として、花楯館跡、兵糧館跡など多くの館跡が発見されている（第１図）。

なお、本遺跡は１９８９年に町立円田幼稚園建設に先立つ事前調査が実施され、南小泉式期の竪穴住居跡１軒、７世紀後半～８世紀前葉の竪穴住居跡５軒をはじめとした遺構が発見された。１９８９年の調査範囲は、今回の調査区の北側に位置している。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	堀の内遺跡	縄文～古墳・古代	13	諏訪館前遺跡	縄文～古墳・平安
2	前戸内遺跡	旧石器・縄文・古代	14	愛宕山遺跡	弥生・古墳
3	高木遺跡	縄文	15	古峯神社古墳	古墳
4	鞘堂山遺跡	縄文・弥生・古代	16	夕向原古墳群	古墳
5	西浦遺跡	縄文・弥生・平安	17	宋膳堂古墳	古墳
6	下永向山遺跡	縄文・弥生・平安	18	天王古墳群	古墳
7	上野遺跡	縄文・弥生・平安	19	西脇古墳	古墳
8	赤鬼上遺跡	弥生・平安・中世	20	中屋敷古墳	古墳
9	大橋遺跡	縄文～古墳・平安	21	諏訪館前横穴墓群	古墳
10	伊原沢下遺跡	古墳	22	八幡山古墳	古墳
11	塩沢北遺跡	弥生・古墳・平安	23	都遺跡	縄文～古墳・古代
12	台遺跡	弥生・古墳・平安	24	花楯館跡	中世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　遺跡周辺の地形と調査区

第２章　調査に至る経緯と調査方法

〔調査に至る経緯〕

今回の発掘調査は、農道白山八堀線改良工事に先立つものである。

平成５年に計画された農道白山八堀線の改良工事は、堀の内遺跡として周知された地域の東部を南北に横切る形で道路改良が行われるというものであったことから、宮城県教育庁文化財保護課・蔵王町農林課・蔵王町教育委員会の３者が埋蔵文化財の保存について協議を行った。その結果、工事対象地域のうち堀の内遺跡に係る部分の地下遺構の状況を把握する必要性から、現道及び拡幅範囲を対象に遺構確認調査を実施することとした。遺構確認調査は平成７年１１月、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て蔵王町教育委員会が実施し、表土及び確認面から遺物を発見するとともに、第Ⅲ層上面で６軒の竪穴住居跡を確認した。この調査成果を基礎資料として再度保存協議を行った結果、農道の改良計画は基本計画どおりに実施すること、工事を実施する前に地下遺構について詳細な発掘調査を実施することが決定した。蔵王町教育委員会では、宮城県教育庁文化財保護課の指導協力の下、平成８年６月５日から７月５日にかけて道路拡幅部分の、また７月１８日から８月２３日にかけて現道部分の発掘調査を実施した。

〔調査の方法〕

調査に先立ち、基準点１及び２を設定し、２つの基準点を結ぶ線分を基準線としてグリッドを設定した。グリッドの起点（Ｓ－０－Ｎ／Ｅ－０－Ｗ）は基準点１とした。基準点１及び２の国家座標は次の通りである。

基準点１：Ｘ＝－２１０７０４．６２７４／Ｙ＝－１３３６０．８９９１
基準点２：Ｘ＝－２１０６３８．５５０２／Ｙ＝－１３３３２．４７５５

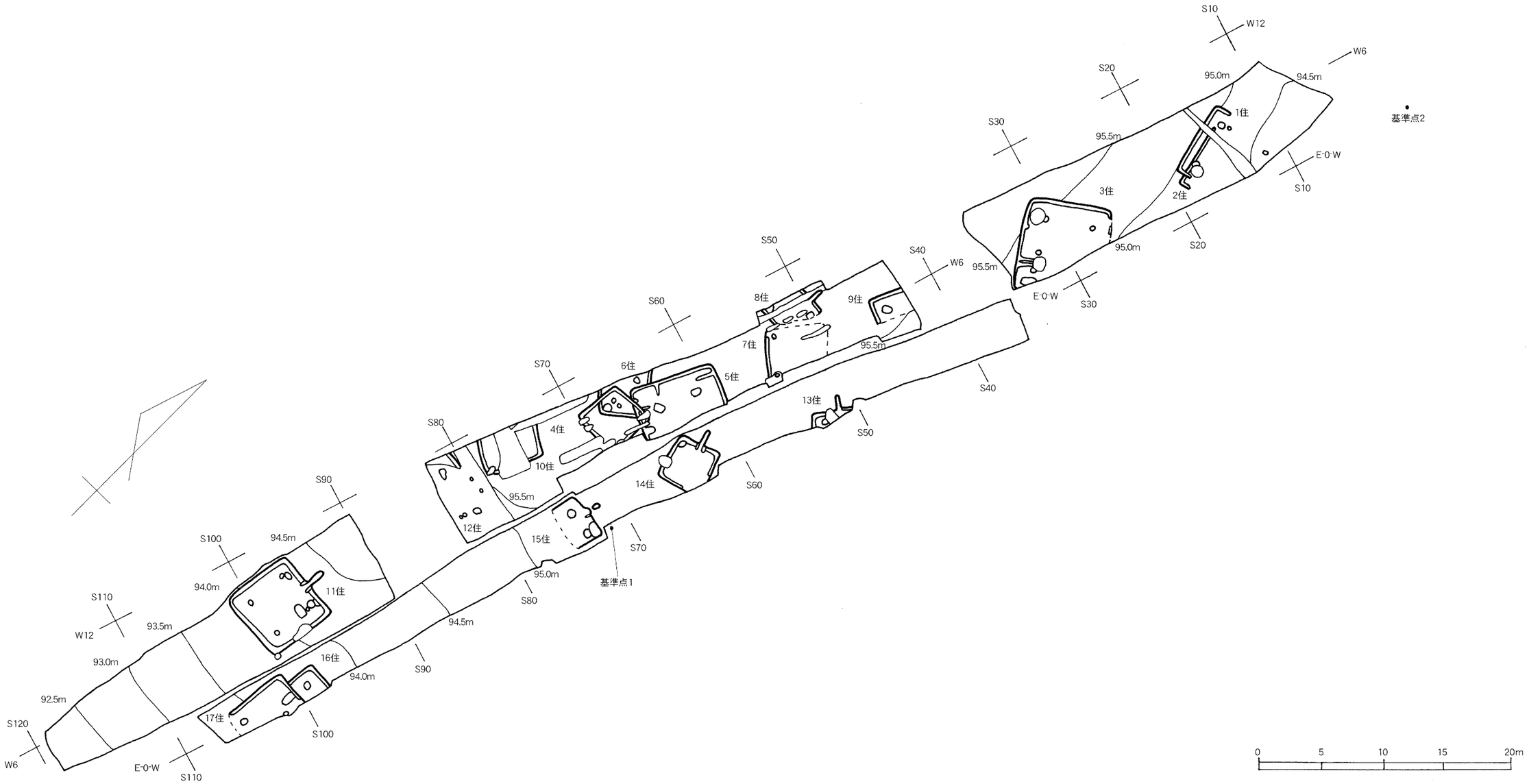
なお、基準線の方位は磁北から１６．８°西に傾いている。

検出した遺構は簡易遣り方測量により１／２０の平面図を作成し、必要に応じて断面図を作成した。また、３５㎜カラースライド及び３５㎜・６０㎜モノクロ写真による記録もあわせて行った。遺構発掘時に出土した遺物は、遺構毎に出土層位及び位置を明確にしながら取り上げた。

〔基本層位〕

調査区の基本層位は、第Ⅰ層が暗褐色の表土、第Ⅱ層が黒褐色の黒ボク土・第Ⅲ層が黄褐

色のロームである。第Ⅰ層は調査区全域に普遍的に存在し、層の厚さもほぼ一定である。第Ⅱ層は調査区北方ではほとんど堆積が認められないが、南方に向かってその厚さを増していく。第Ⅲ層の上面は、ＳＯ～Ｓ８１の範囲ではほぼ平坦だが、それより南方では徐々に落ち込み、Ｓ１００以降では傾斜が急になり、Ｓ１１０付近から沢状の地形になる。第Ⅲ層上面の落ち込みと第Ⅱ層の層厚の増加はほぼ一致しており、地表面でも傾斜はあるものの、第Ⅲ層のそれと比較してかなり緩やかである。


S10
W12
W6
S20
95.0m
94.5m
1住
基準点2
S30
95.5m
E-0-W
S10
3住
2住
95.0m
S20
S50
S40
W6
95.5m
E-0-W
S30
S60
8住
9住
7住
95.5m
S70
6住
5住
S40
13住
S80
4住
S50
10住
14住
S60
95.5m
S90
12住
15住
S70
S100
94.5m
95.0m
基準点1
94.0m
11住
S80
S110
94.5m
W12
93.5m
16住
93.0m
S90
94.0m
92.5m
17住
S120
S100
W6
E-0-W
S110
0
5
10
15
20m

第３図　遺構配置図

第３章　発見された遺構と出土遺物

今回の調査において発見された遺構は竪穴住居跡１７軒で、それらの遺構の内外から、土師器、須恵器、弥生土器、続縄文土器、鉄製品、石器が出土している。

第１節　竪穴住居跡と出土遺物

第１号竪穴住居跡（第４図）

［位置・確認面］Ｓ１２～２１／ＷＯ～９の第Ⅲ層上面で確認。

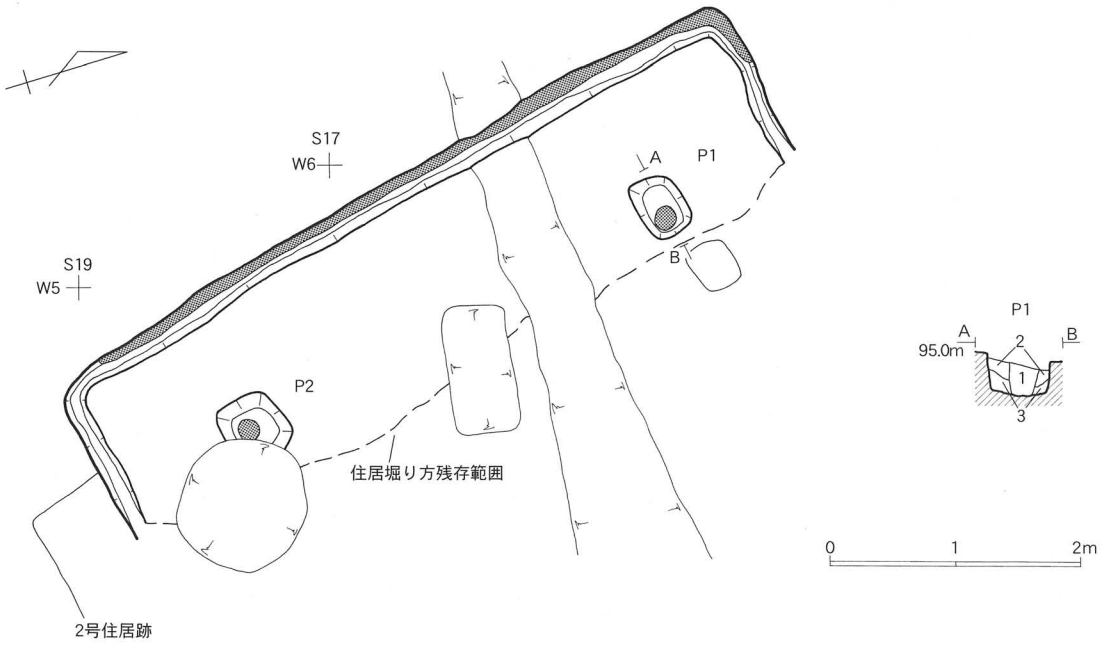
［重複］第２号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］東側の大部分が削平によって消失しており、西辺部のみが残存する。残存部から東西１.２ｍ以上、南北６.３ｍの方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］削平により残存しない。

［壁］削平により残存しない。

［床］堆積土が残存しないため床面を確定することができない。周溝に囲まれた範囲は第Ⅲ



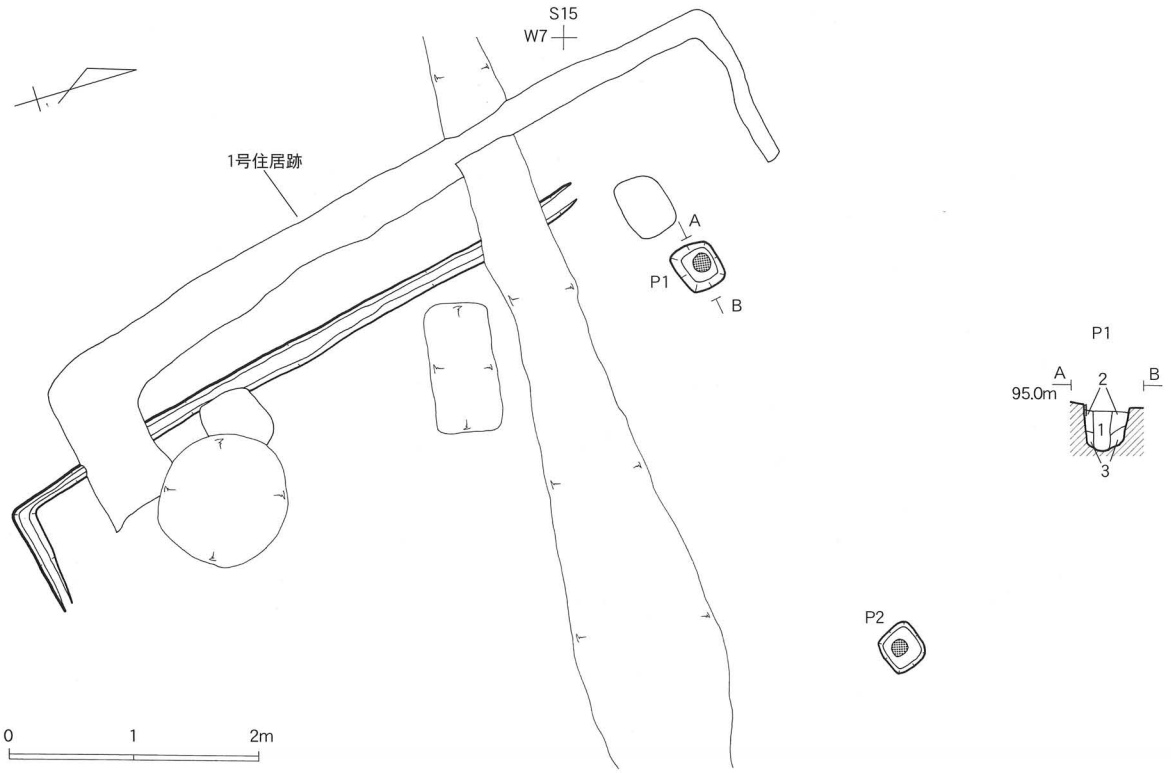
No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR３/１黒褐色	シルト	地山ブロック・地山粒含む　柱痕跡
2	10YR３/３暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む　炭化物含む　柱穴堀り方埋土
3	10YR４/２灰黄褐色	シルト	地山粒多く含む　柱穴堀り方埋土

第４図　第１号竪穴住居跡

層上面及び掘り方埋土（１０YR３／１　黒褐色シルト。地山ブロックを多く含み、炭化物を若干含む）であることから、第Ⅲ層及び掘り方埋土を床としていたと考えられる。
［柱穴］住居範囲内と考えられる位置から２基のピット（Ｐ１・２）を検出した。このうち、Ｐ１は住居北西隅部付近に、Ｐ２は南西隅部付近に位置し、Ｐ１とＰ２を結ぶ直線は住居西辺と平行する。これらのピットの平面形は長軸約５５㎝×短軸４０～４８㎝の長方形で、深さは約３５㎝である。いずれのピットでも直径１４～１８㎝の円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１及びＰ２は位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。
［周溝］西部に残存する。幅１２～２６㎝、深さ３～１３㎝。西辺部～北西隅部付近の周溝内から幅３～１３㎝、深さ５～１１㎝の壁材痕跡を確認した。
［遺物］出土していない。

第２号竪穴住居跡（第５図）
［位置・確認面］Ｓ１２～２１／WO～９の第Ⅲ層上面で確認。
［重複］第１号竪穴住居跡と重複し、これより古い。
［平面形・規模］東側の大部分が削平によって消失しており、西辺部の周溝のみ残存する。残存部から東西０．９ｍ以上、南北５．２ｍ以上の方形を基調とするものと考えられる。
［堆積土］削平により残存しない。
［壁］削平により残存しない。
［床］削平により残存しない。
［柱穴］住居範囲内と考えられる位置から２基のピット（Ｐ１・２）を検出した。
Ｐ１とＰ２を結ぶ直線は住居西辺と直交する。これらのピットの平面形は長軸３６～４０㎝×短軸３０～３５㎝の長方形で、深さはＰ１が３８㎝、Ｐ２が６㎝である。いずれのピットでも直径１４㎝の円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１及び２は位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。
［周溝］西辺部及び南西隅部に残存する。幅８～２４㎝、深さ３～９㎝。
［遺物］出土していない。

第３号竪穴住居跡（第６～９図）
［位置・確認面］Ｓ２４～３６／WO～９の第Ⅲ層上面で確認。
［平面形・規模］東側の半分程度が削平によって消失しており、西半のみが残存する。残存部から北西辺６．７ｍ、南西辺７．２ｍの方形を基調とするものと考えられる。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	2.5YR4/2 灰赤色	シルト	白色粘土粒多く含む　柱痕跡
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	白色粘土ブロック・地山ブロック含む　柱穴堀り方埋土
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	地山粒多く含む　柱穴堀り方埋土

第５図　第２号竪穴住居跡

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

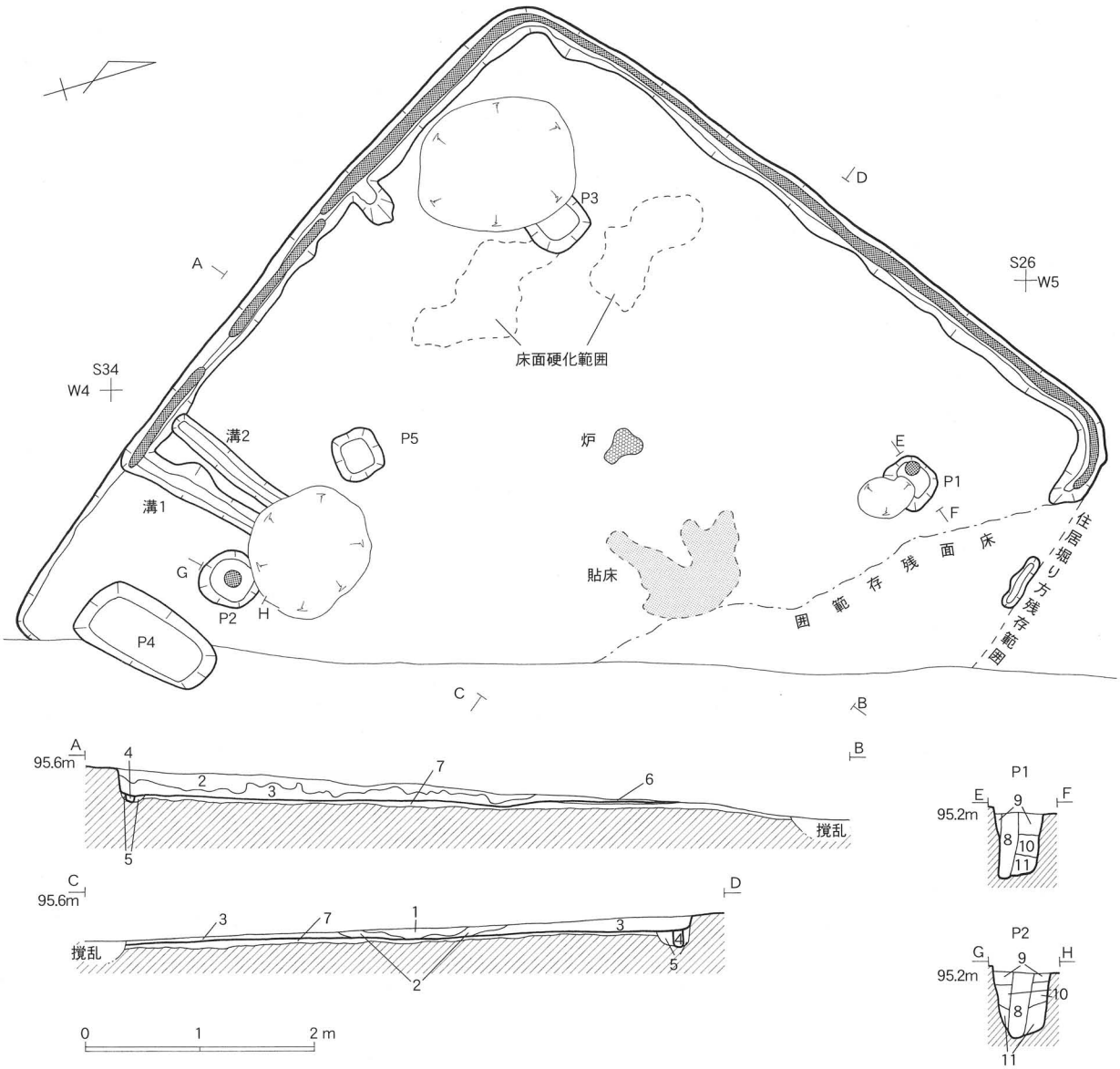
［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西隅部で３４cmである。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。中央部で部分的に貼床が施されている。また、Ｐ３付近の床面が部分的に硬化している。

［炉］住居中央部に、床面が焼けて赤変している部分を確認した。その範囲は径約３０cmの不整形で、炉と考えられる。

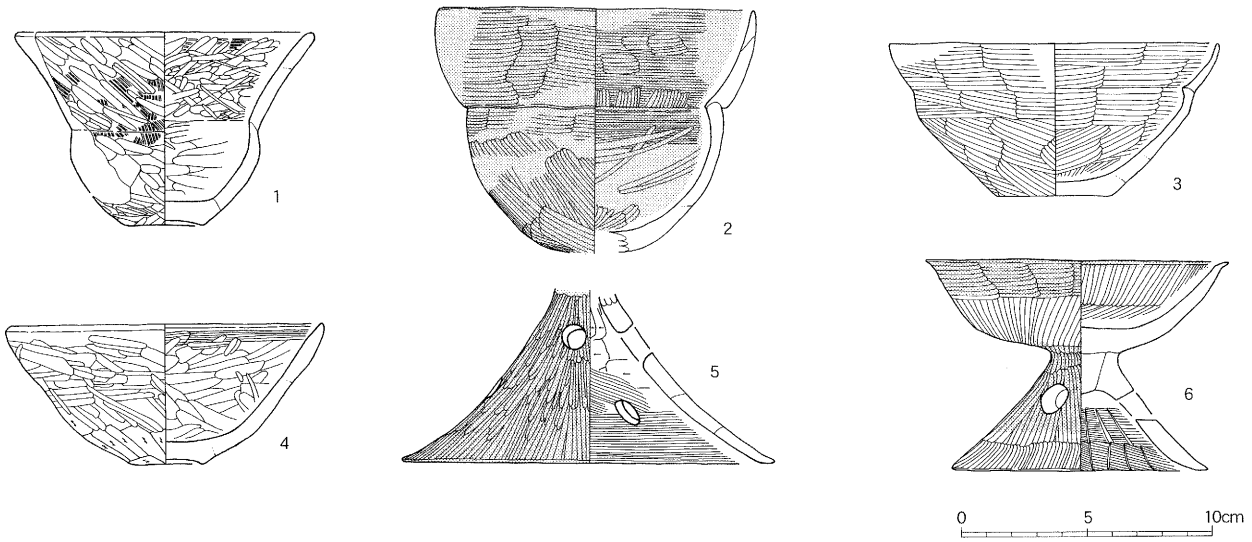
［柱穴］住居の対角線上から３基のピット（Ｐ１～３）を検出した。これらのピットの平面形は長軸４４～５２cm×短軸４０～５０cmの長方形で、床面からの深さは５５～６４cmである。Ｐ１・２から直径１５～１８cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１～３は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］南隅部を除き残存範囲を全周する。幅１６～３０cm、深さ５～１４cm。周溝のほぼ



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR 2 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	地山粒含む
2	10YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	地山粒含む
3	10YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	地山小ブロック・地山粒含む
4	10YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	地山粒少量含む　壁材痕跡
5	10YR 2 / 3 黒 褐 色	シ ル ト	地山粒含む　周溝埋土
6	10YR 6 / 6 明 黄 褐 色	粘 土	貼床
7	10YR 3 / 3 暗 褐 色	シ ル ト	地山ブロック・炭化物多く含む　住居堀り方埋土
8	10YR 3 / 3 暗 褐 色	シ ル ト	地山粒含む　柱痕跡
9	10YR 4 / 3 にぶい黄褐色	シ ル ト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土
10	10YR 5 / 4 にぶい黄褐色	シ ル ト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土
11	10YR 5 / 4 にぶい黄褐色	シ ル ト	柱穴堀り方埋土

第６図　第３号竪穴住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏	坏A2	貯蔵穴埋土	ヘラケズリ・ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	12	3.1	7.7	8-4
2	土師器坏	坏A1	貯蔵穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	ヘラミガキ→朱彩	不明	13	—	—	8-1
3	土師器坏	坏A1	貯蔵穴埋土	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	13	4.6	6.1	8-2
4	土師器坏	坏A3	貯蔵穴埋土	下半ヘラケズリ→上半ヘラミガキ	ヘラミガキ→口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	13	2.9	5.6	8-3
5	土師器器台	器台A	貯蔵穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	受け部:不明	脚部内面:ヘラナデ	—	15	—	8-13
6	土師器高坏		貯蔵穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	坏部:ヘラミガキ	脚部内面:ヘラナデ	12	10	8.4	8-14

第７図　第３号竪穴住居跡出土遺物（1）

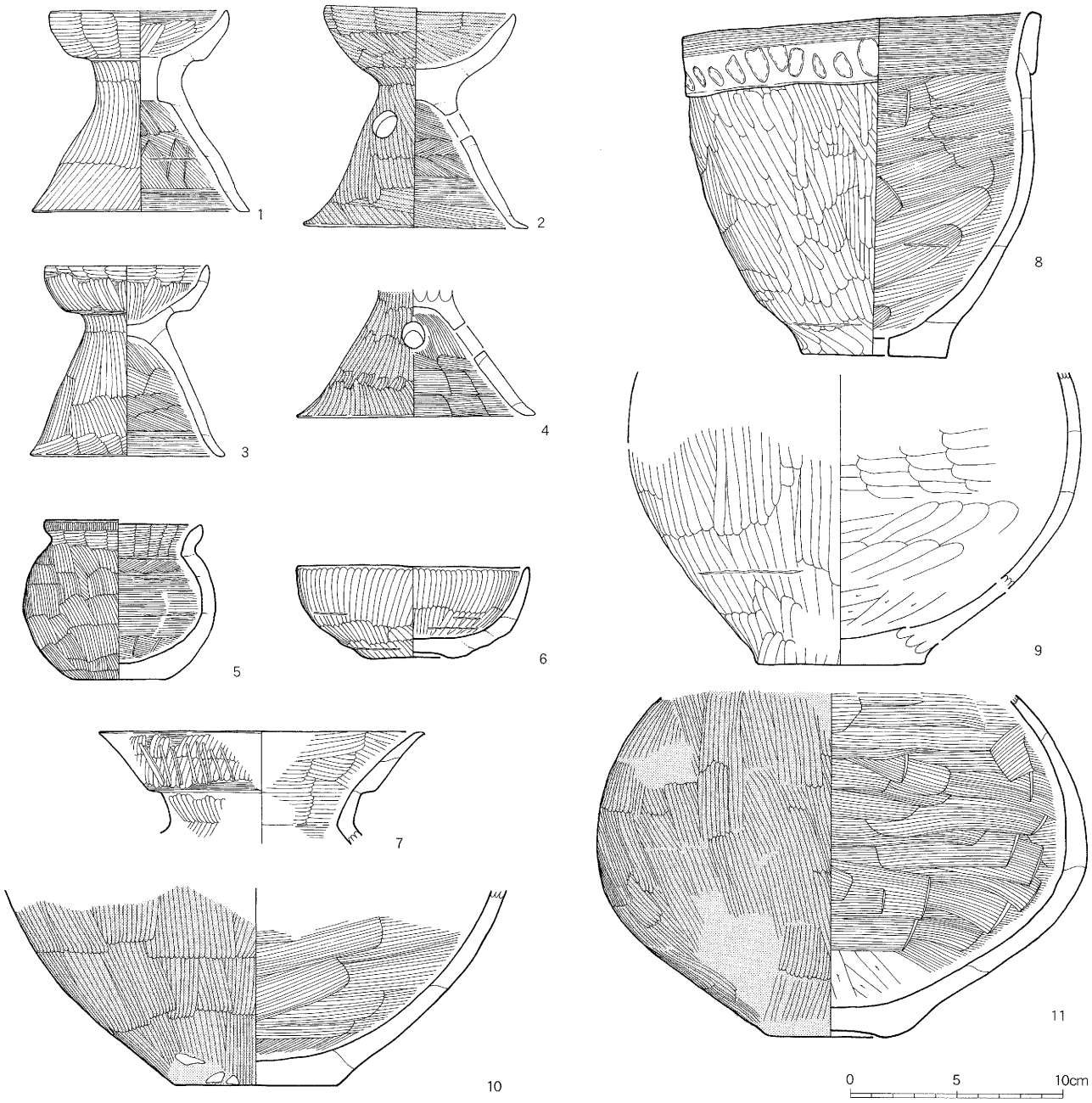
全ての範囲から幅３～１２cm、深さ５～１５cmの壁材痕跡を確認した。

［溝］南西壁際の床面から、壁と直交する溝を２条確認した（溝１・２）。いずれも幅２０cm、深さ１０cmで、南西辺の周溝と重複する。

［貯蔵穴］住居南隅部から１基のピット（Ｐ４）を検出した。Ｐ４の平面形は長軸１２０cm×短軸６６cmの長方形で、床面からの深さは９０cmである。Ｐ４は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

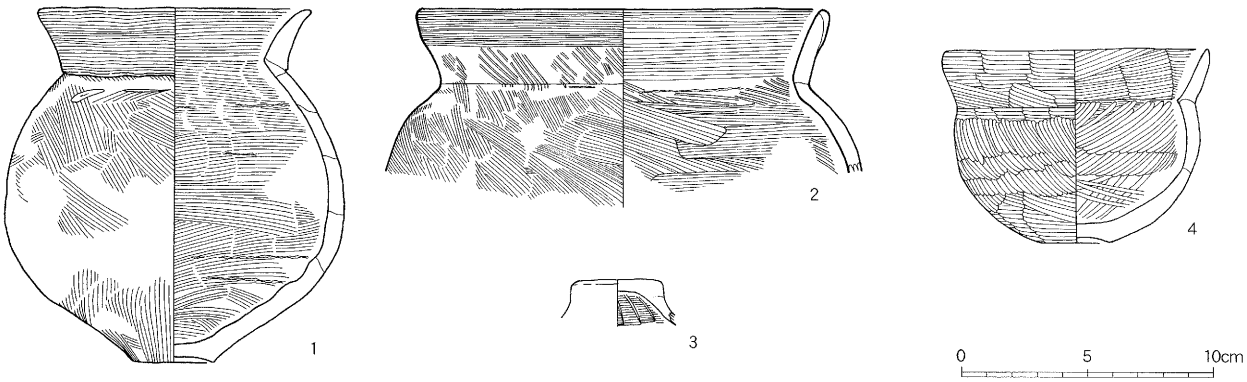
［その他のピット］溝２付近から１基のピット（Ｐ５）を検出した。Ｐ５の平面形は一辺４０cmの方形で、床面からの深さは１７cmである。

［遺物］床面・住居堆積土・周溝埋土・貯蔵穴埋土から土師器が、住居堆積土から須恵器が出土した。また、貯蔵穴埋土から鉄製品が出土したが、細片のため器種の確定はできず、図示することもできなかった。土師器は２１点が図化できた。第７図１～６は貯蔵穴埋土から出土したものである。また、第８図７・８は貯蔵穴付近の床面から出土したものである。第８図１・２・５・６・１１及び第９図１・２は炉の北西寄りの床面からまとまって出土したものである。このうち椀（第８図６）は壺（同１１）の内部から、正位の入れ子状になって出土した。その他、堆積土から蓋？（第９図３）が出土した。



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器器台	器台B	床	ヘラミガキ	受け部:ヘラミガキ	脚部内面:ヘラナデ	8.5	10.2	9.5	8-7
2	土師器器台	器台B	床	ヘラミガキ→朱彩	受け部:ヘラミガキ→朱彩	脚部内面:ヘラナデ	9	10.8	10.4	8-6
3	土師器器台	器台B	床	ヘラミガキ	受け部:ヘラミガキ	脚部内面:ヘラナデ	7.3	9.2	9.1	8-11
4	土師器器台	器台B	床	ヘラミガキ→朱彩	受け部:不明	脚部内面:ヘラナデ	—	11.2	—	8-10
5	土師器壺	壺B1	床	ヘラミガキ	体部ナデ:口縁ヘラミガキ	ヘラケズリ	7.5	4.5	7.4	8-17
6	土師器椀		床	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	11.1	3.2	4.5	8-9
7	土師器壺	壺A	床	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	15.3	—	—	
8	土師器甑		床	ヘラミガキ・口縁ユビオサエ	体部ナデ:口縁ヨコナデ	ヘラケズリ　孔径1.3cm	17	6.9	16.4	8-19
9	土師器壺	壺A	床	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	—	8	—	8-12
10	土師器壺	壺A	床	ヘラミガキ→朱彩　布目圧痕	ヘラナデ	ヘラケズリ	—	7.8	—	8-15
11	土師器壺	壺A	床	ヘラミガキ→朱彩	ヘラナデ	ヘラケズリ	—	5	—	8-18

第８図　第３号竪穴住居跡出土遺物（2）



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器甕	甕A1	床	体部ナデ　口縁ヨコナデ	体部ヘラナデ　口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	11	3.3	14.2	8-8
2	土師器甕	甕A1	床	ハケメ・ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ→口縁ヨコナデ	不明	16.5	—	—	8-16
3	土師器蓋?		堆積土	ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	—	—	—	8-5
4	土師器坏		確認面	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	10.6	2.7	7.6	

第９図　第３号竪穴住居跡出土遺物（3）

第４号竪穴住居跡（第１０図）

［位置・確認面］Ｓ６３～７２／Ｗ３～１２の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第５号・６号竪穴住居跡と重複し、これらの中で最も新しい。

［平面形・規模］１辺３.９ｍの不整な方形である。

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層及び第５・６号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西辺部で９㎝である。

［床］第Ⅲ層及び第５・６号竪穴住居跡の堆積土を床としており、平坦である。

［柱穴］検出されなかった。

［周溝］全周する。幅１６～３０㎝、深さ４～９㎝。

［遺物］住居堆積土から土師器・須恵器・石製模造品（第１０図３）が出土した。土師器は坏（第１０図１）及び壺（同２）の２点が図化できた。

第５号竪穴住居跡（第１１・１２図）

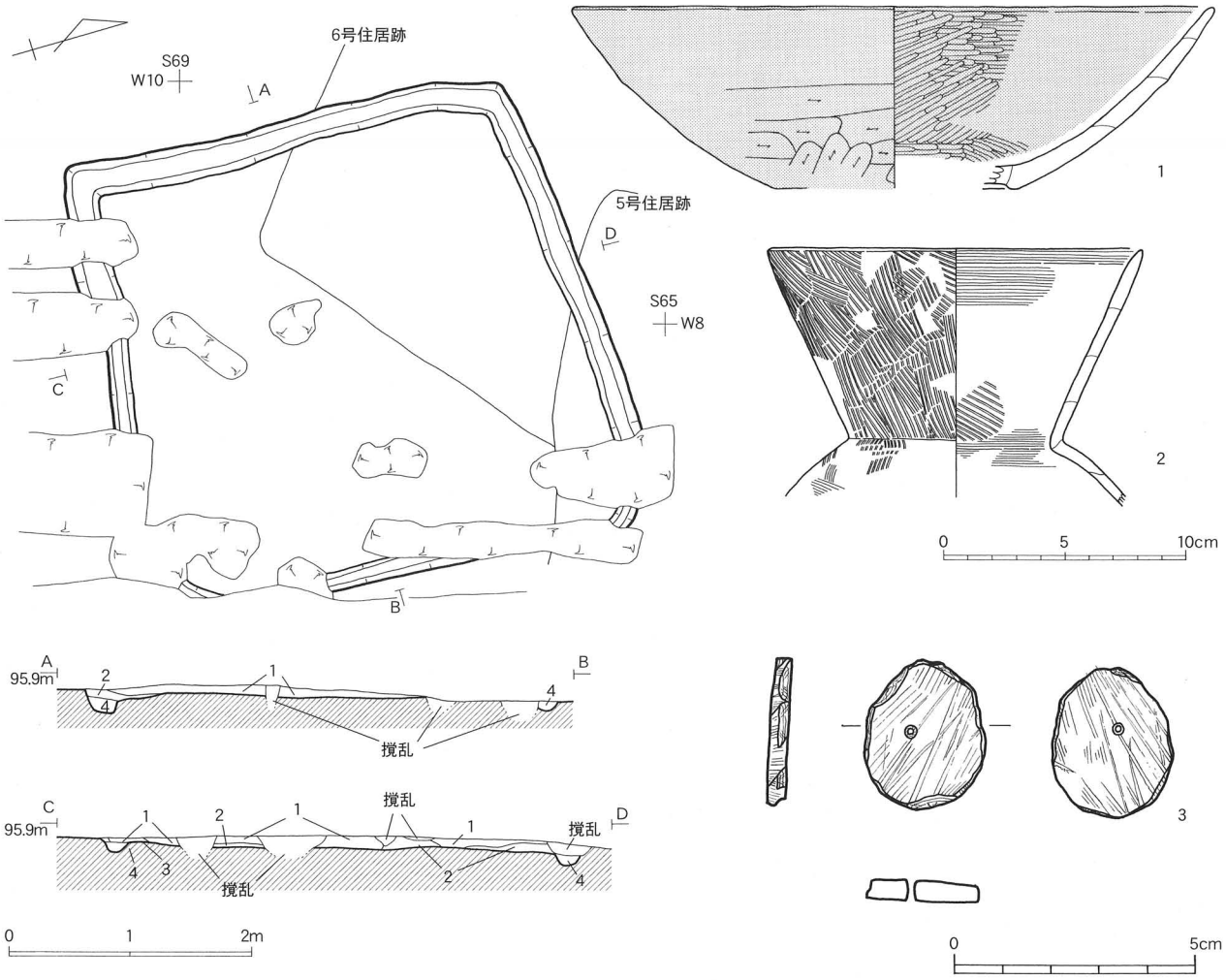
［位置・確認面］Ｓ５７～６６／Ｗ３～１２の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第４・６号竪穴住居跡と重複し、第４号竪穴住居跡より古く、第６号竪穴住居跡より新しい。

［平面形・規模］東部が削平によって消失しており、西部のみが残存する。残存部から東西４.２ｍ以上、南北７.２ｍの方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層及び第６号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存



No.	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	炭化材・炭化物・焼土ブロック多く含む
2	10YR 3 / 1 黒 褐 色	シ ル ト	炭化物・地山小ブロック・地山粒含む
3	10YR 3 / 1 黒 褐 色	シ ル ト	焼土多く含む　炭化物・地山小ブロック・地山粒含む
4	10YR 4 / 3 にぶい黄褐色	シ ル ト	地山土多く含む　周溝埋土

No.	器 種 別	層　位	外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏	堆積土	ヘラケズリ→ヘラナデ→朱彩	ヘラミガキ→　朱彩	不明	26.4	9.8	7.5	9-2
2	土師器壺	確認面	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ→口縁ヨコナデ	不明	15.5	—	—	9-1

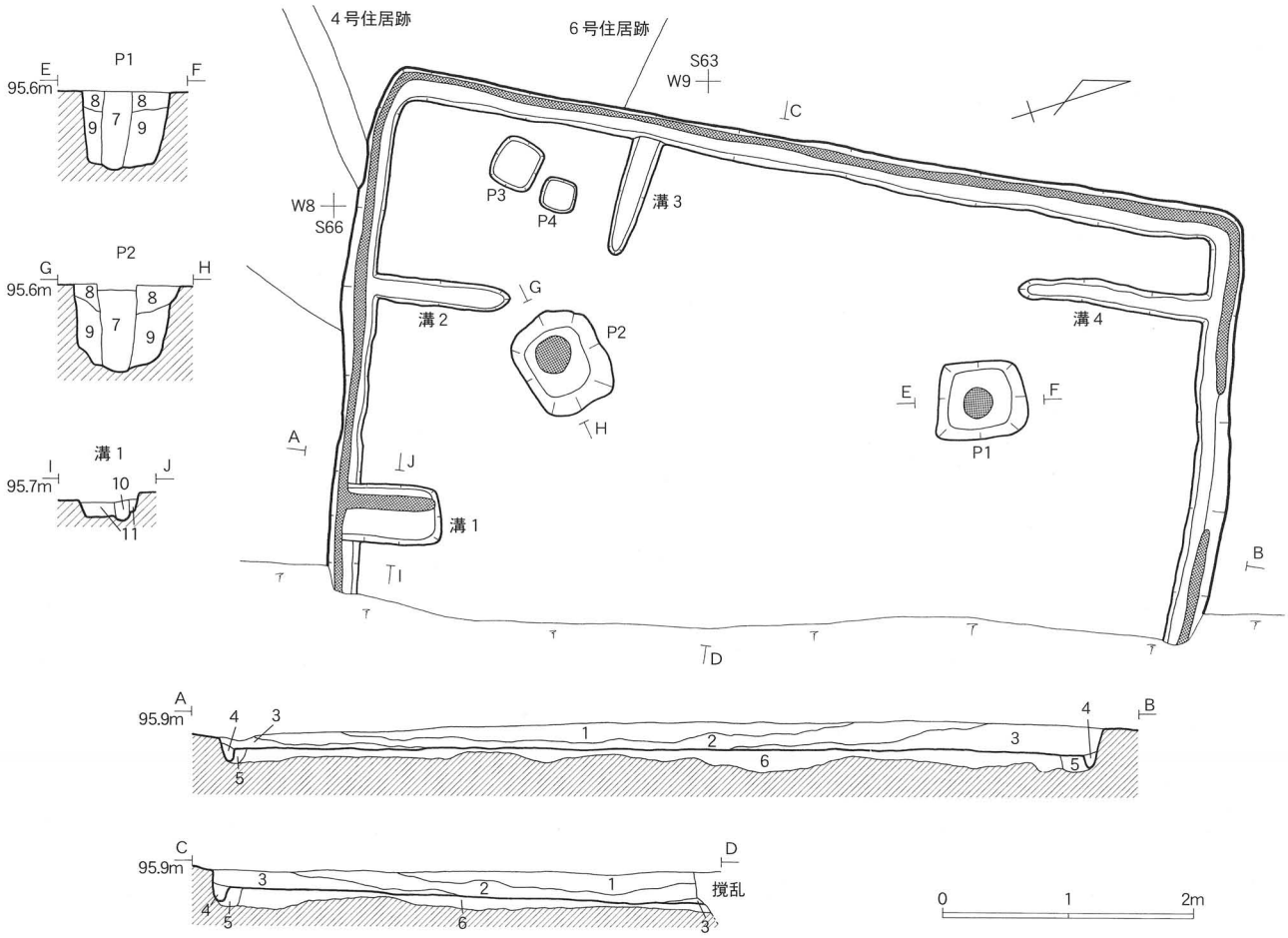
No.	器 種 別	層　位	材　質	全長	全幅	厚さ	備　　考	図版
3	石製模造品	堆積土	粘板岩	3.1	2.5	0.4	円盤状　孔径3mm　表面・側面に擦過痕	11-15

第10図　第4号竪穴住居跡と出土遺物

壁高は、最も残存状態の良い西辺部で２２㎝である。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。

［柱穴］住居の対角線上から２基のピット（Ｐ１・２）を検出した。これらのピットの平面形は長軸７０～８２㎝×短軸６０～６８㎝の長方形で、床面からの深さは６２～７０㎝で



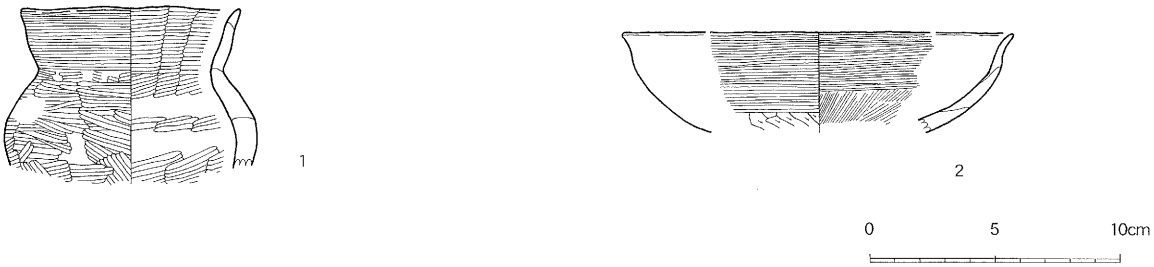
No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR３/１黒褐色	シルト	炭化物多く含む
2	10YR３/２暗褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む　炭化物多く含む
3	10YR３/３黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒少量含む　炭化物含む
4	10YR４/２灰黄褐色	シルト	地山ブロック含む　壁材痕跡
5	10YR４/４褐色	シルト	地山ブロック多く含む　周溝埋土
6	10YR３/４暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む　住居堀り方埋土
7	10YR３/２暗褐色	シルト	地山ブロック・黒色土含む　柱痕跡
8	10YR５/６黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土
9	10YR５/４にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱孔堀り方埋土
10	10YR３/３暗褐色	シルト	地山土含む　材の痕跡
11	10YR３/４暗褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む　溝埋土

第11図　第５号竪穴住居跡

ある。いずれのピットでも直径２２～３０cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１・２は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］残存範囲を全周する。幅２０～３０cm、深さ３～９cm。北辺の一部を除いた周溝の全範囲から、幅５～１２cm、深さ８～１２cmの、壁材痕跡を確認した。

［溝］壁際の床面から、壁と直交する溝を４条確認した（溝１～４）。それぞれ周溝と重複する。溝１は全長８６cm、幅４２cm、床面からの深さ２０cmで、住居南壁際に位置する。溝内



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器壺	壺B1	床	体部ヘラミガキ　口縁ヨコナデ	ヘラミガキ	不明	8.8	－	－	
2	土師器坏		堆積土	ヘラケズリ→ナデ	ナデ	不明	15.6	－	－	

第12図　第５号竪穴住居跡出土遺物

に幅１２cm、深さ１６cmの帯状の黒褐色土を確認した。この黒褐色土は周溝の壁材痕跡と重複する。溝２～４は全長９６～１５０cm、幅２０cm、床面からの深さ１０cmである。溝２及び３は住居南西隅部付近に、溝４は北西隅部付近に位置する。

［珪藻土塊］住居南西隅部の床面に、平面形４０cm×３０cm、重量約３kgの珪藻土塊が置かれていた。珪藻土塊には土師器壺の破片（後述）が混入していた。

［遺物］床面・住居堆積土・珪藻土塊から土師器が出土した。このうち床面及び珪藻土塊出土の壺（第１２図１）と、住居堆積土出土の坏（同２）の２点が図化できた

第６号竪穴住居跡（第１３・１４図）

［位置・確認面］Ｓ６３～６９／Ｗ６～１２の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第４・５号竪穴住居跡と重複し、これらの中で最も古い。

［平面形・規模］北東隅部が第５号竪穴住居跡によって破壊されており、また、西部が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、現状から一辺約４.２ｍの方形を基調とするものと考えられる。

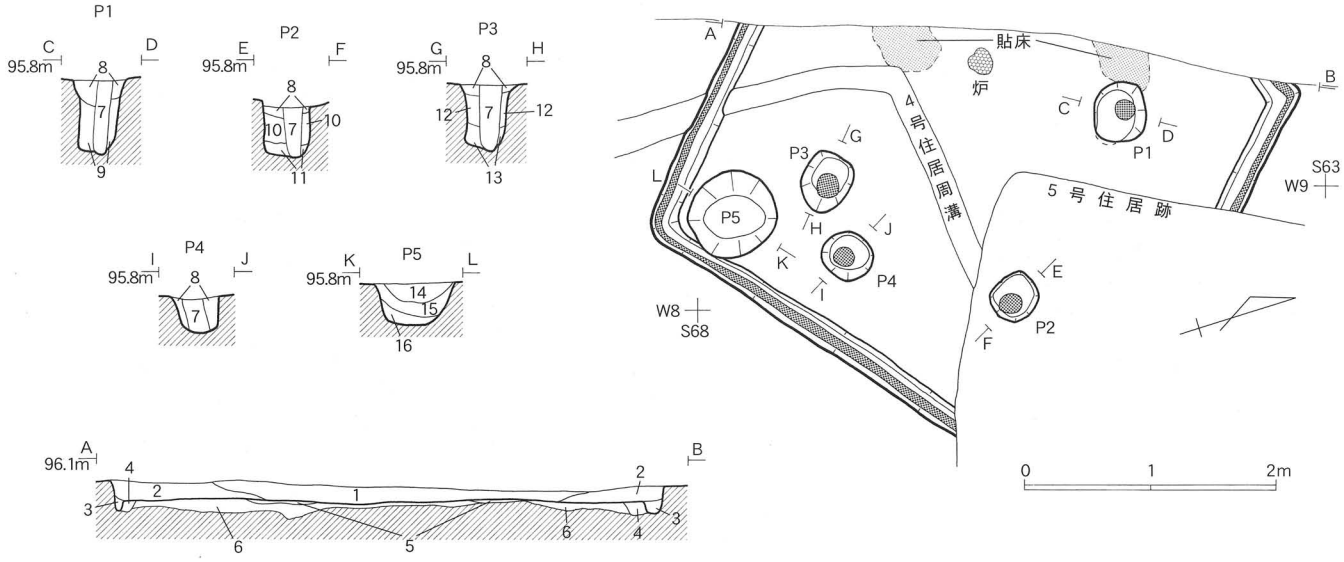
［堆積土］２層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で１１cmである。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。西側に部分的な貼床が施されている。

［炉］住居中央部西寄りに、床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は径２０cmの不整円形で、炉と考えられる。

［柱穴］住居の対角線上から３基のピット（Ｐ１～３）を検出した。これらのピットの平面形は長軸３８～４９cm×短軸３５～４２cmの不整長方形で、床面からの深さは４６～６２cm



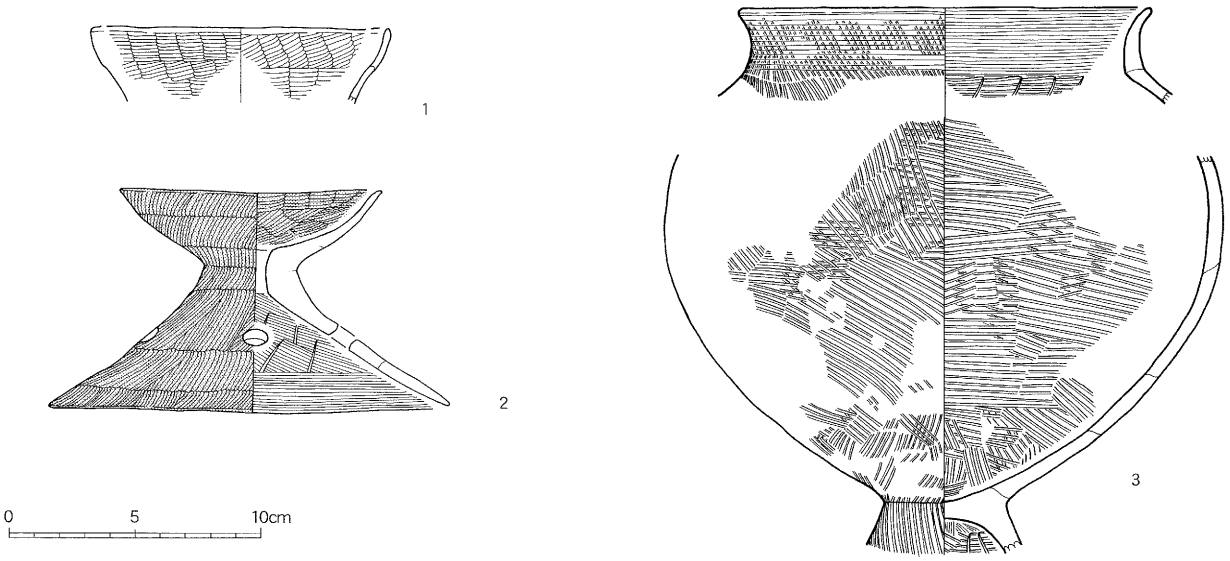
No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR２/２黒褐色	シルト	地山粒含む
2	10YR３/４暗褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む　炭化物多く含む
3	10YR４/２灰黄褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒少量含む　壁材痕跡
4	10YR４/３にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック含む　壁材痕跡
5	10YR５/４にぶい黄褐色	粘土	貼床
6	10YR４/２灰黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　住居堀り方埋土
7	10YR３/３暗褐色	シルト	地山ブロック・地山土含む　柱痕跡
8	10YR４/４褐色	シルト	地山ブロック・黒色土ブロック含む　柱穴堀り方埋土
9	10YR３/４暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土
10	10YR３/２黒褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土
11	10YR４/３にぶい黄褐色	シルト	柱穴堀り方埋土
12	10YR４/２灰黄褐色	シルト	地山粒少量含む　柱穴堀り方埋土
13	10YR４/４褐色	シルト	柱穴堀り方埋土
14	10YR２/２黒褐色	シルト	地山粒少量含む　P5埋土
15	10YR３/３暗褐色	シルト	地山小ブロック含む　P5埋土
16	10YR３/４暗褐色	シルト	地山ブロック含む　P5埋土

第13図　第６号竪穴住居跡

である。いずれのピットでも直径１２～１８cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１～３は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、東壁際の床面から１基のピット（Ｐ４）を検出した。Ｐ４の平面形は一辺３６cmの隅丸方形で、床面からの深さは３０cmである。このピットから、壁に向かって傾斜した径約１５cmの円形の柱痕跡を確認した。

［周溝］残存範囲を全周する。幅１８～２２cm、深さ８～１０cm。周溝の全範囲から、幅４～８cm、深さ５～９cmの、壁材痕跡を確認した。

［貯蔵穴］住居南隅部から１基のピット（Ｐ５）を検出した。Ｐ５の平面形は径７０cmの不整円形で床面からの深さは３４cmである。Ｐ５は位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏	坏A1	貯蔵穴埋土	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	11.8	—	—	
2	土師器器台	器台A	貯蔵穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	受け部:ヘラミガキ→朱彩	脚部内面:ヘラナデ	10.1	16	8.7	9-3
3	土師器台付甕		P2埋土	ハケメ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	台内面:ハケメ	16.8	—	—	9-4

第14図　第6号竪穴住居跡出土遺物

［遺物］住居堆積土・Ｐ２埋土・貯蔵穴底面・貯蔵穴埋土から土師器が出土し、このうち３点が図化できた。第１４図１は貯蔵穴埋土から出土した坏である。同２は貯蔵穴底面から出土した器台、同３はＰ２埋土及び住居堆積土から出土した台付甕である。

第７号竪穴住居跡（第１５図）

［位置・確認面］Ｓ４８～５７／Ｗ３～９の第Ⅲ層上面で確認。

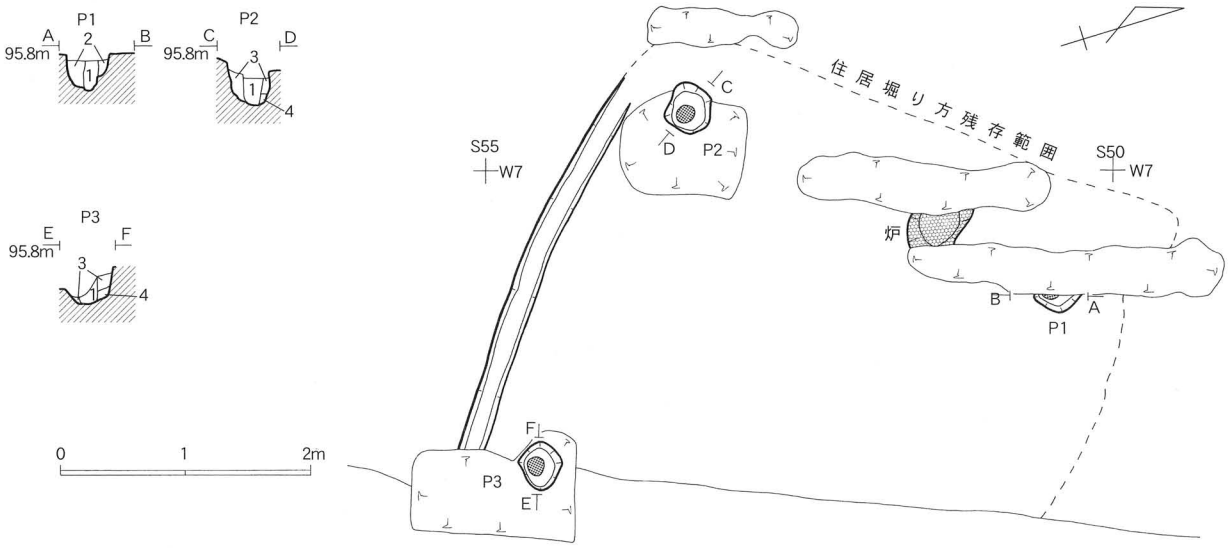
［平面形・規模］北側の大部分が削平によって消失しており、また、東部が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西３.８ｍ以上、南北４.７ｍの方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］削平により残存しない。

［壁］削平により残存しない。

［床］堆積土が残存しないため床面を確定することができない。住居範囲と考えられる部分では掘り方埋土（１０YR３／１黒褐色シルト。地山ブロックを多く含み、炭化物を若干含む）が残存していることから、少なくとも部分的には掘り方埋土を床としていたと考えられる。

［炉］住居範囲内と考えられる位置から径約５０cm、深さ約１０cmの不整楕円形のピットが検出された。このピットの埋土は焼土（２.５YR４／６ 赤褐色シルト）で、炉と考えられる。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR３/３暗褐色	シルト	地山ブロック含む　柱痕跡
2	10YR３/２黒褐色	シルト	地山ブロック・地山粒多く含む　柱穴堀り方埋土
3	10YR３/４暗褐色	シルト	地山ブロック含む　柱穴堀り方埋土
4	10YR４/６褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土

第15図　第７号竪穴住居跡

［柱穴］住居範囲内と考えられる位置から３基のピット（Ｐ１～３）を検出した。このうちＰ２とＰ３の中心を結ぶ直線は住居南辺に平行で、Ｐ１とＰ２の中心を結ぶ直線は住居南辺に直交する。これらのピットの平面形は一辺３４～４０cmの不整方形で、床面からの深さは２８～３８cmである。いずれのピットでも直径１０～１６cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１～３は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］南辺部に残存する。幅約２０cm、深さ６～１１cm。

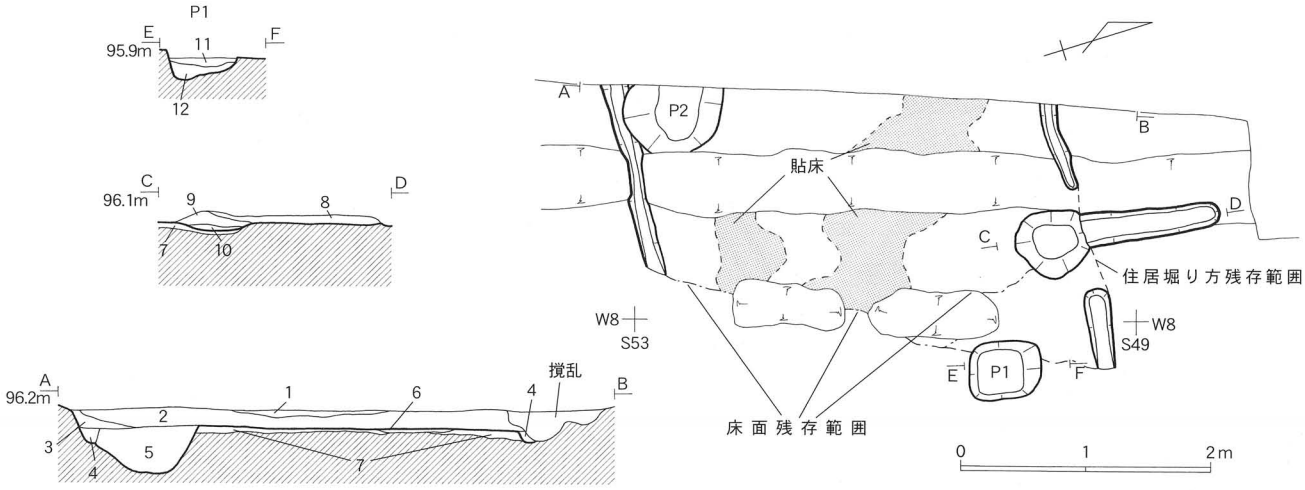
［遺物］炉ピットの埋土から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

第８号竪穴住居跡（第１６図）

［位置・確認面］Ｓ４８～５４／Ｗ６～１２の第Ⅲ層上面で確認。

［平面形・規模］東側が削平により消失しており、また、西側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西２．１ｍ以上、南北３．５ｍの方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR２/１黒	シルト	
2	10YR３/１黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒多く含む
3	10YR３/２黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
4	10YR４/１褐灰色	シルト	地山ブロック多く含む　周溝堆積土
5	10YR４/２灰黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　P2埋土
6	10YR４/４褐色	シルト	貼床
7	10YR４/３にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック多く含む　住居堀り方埋土
8	5YR２/３極暗赤褐色	シルト	焼土・炭化物多く含む　カマド・煙道内堆積土
9	5YR３/４暗赤褐色	シルト	焼土・炭化物多く含む　カマド内堆積土
10	2.5YR４/４にぶい赤褐色	シルト	焼土ブロック多く含む　カマド内堆積土
11	10YR４/１褐灰色	シルト	地山粒含む
12	10YR３/４暗褐色	シルト	地山小ブロック含む

第16図　第８号竪穴住居跡

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い南辺部で１５cmである。

［床］掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。中央部に部分的な貼床が施されている。

［カマド］北壁に設置されており、燃焼部と煙道が確認された。燃焼部の底面は床面を浅く掘りくぼめて形成されており、幅５６cm、奥行５６cm、床面からの深さ６cmである。煙道は先端部が削平によって失われており、残存する部分は軸長１０８cm、基部幅２９cm、基部深さ４cmで、底面はほぼ水平である。カマド側壁は確認されなかった。

［柱穴］北東部の床面から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は長軸５５cm×短軸４７cmの長方形で、床面からの深さは２５cmである。Ｐ１は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］南部及び北部に残存する。幅１４～２０cm、深さ４～９cm。

［貯蔵穴］住居南壁際から１基のピット（Ｐ２）を検出した。ピット西部が調査区外に及んでおり全体形は不明だが、平面形は径７８cmの不整円形を基調とするものと考えられ、床面

からの深さは３０cmである。Ｐ２は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

［遺物］住居堆積土から土師器・須恵器が出土した。また、カマド燃焼部底面から土師器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

第９号竪穴住居跡（第１７図）

［位置・確認面］Ｓ４２～４８／Ｗ３～９の第Ⅲ層上面で確認。

［平面形・規模］東側が削平により消失しており、また、北側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西２．１ｍ以上、南北２．８ｍ以上の方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］削平により残存しない。

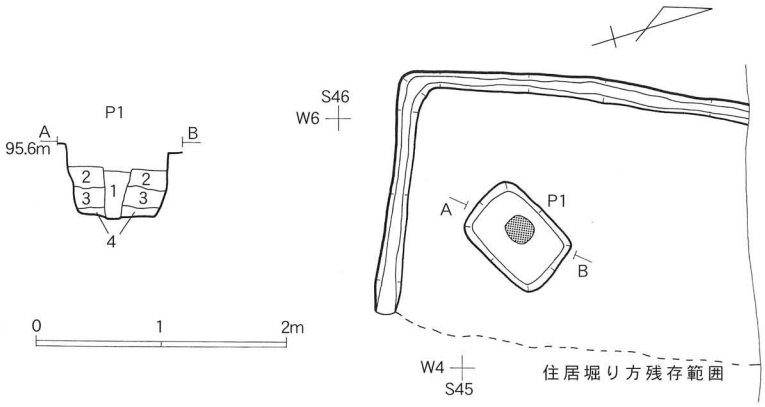
［壁］削平により残存しない。

［床］堆積土が残存しないため床面を確定することができない。周溝に囲まれた範囲は掘り方埋土　（１０ＹＲ４／３　にぶい黄褐色シルト。地山ブロック多量に含む）であることから、少なくとも部分的には掘り方埋土を床としていたとも考えられる。

［柱穴］住居南西隅部から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は長軸８４cm×短軸５８cmの長方形で、床面からの深さは４２cmである。このピットから直径２２cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］南部及び西部に残存する。幅１４～２０cm、深さ６～９cm。

［遺物］確認面から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR３/１黒褐色	シルト	炭化物・地山小ブロック含む　柱痕跡
2	10YR４/６褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土
3	2.5Y４/４オリーブ褐色	砂質シルト	地山ブロック多く含む　グライ化　柱穴堀り方埋土
4	10YR５/６黄褐色	シルト	地山小ブロック多く含む　柱穴堀り方埋土

第17図　第９号竪穴住居跡

第１０号竪穴住居跡（第１８図）

［位置・確認面］Ｓ７２～８１／Ｗ６～１２の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第１２号竪穴住居跡と重複し、これより古い。

［平面形・規模］東辺が撹乱により破壊されており、また、西側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西３．２ｍ以上、南北４．７ｍの方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］４層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

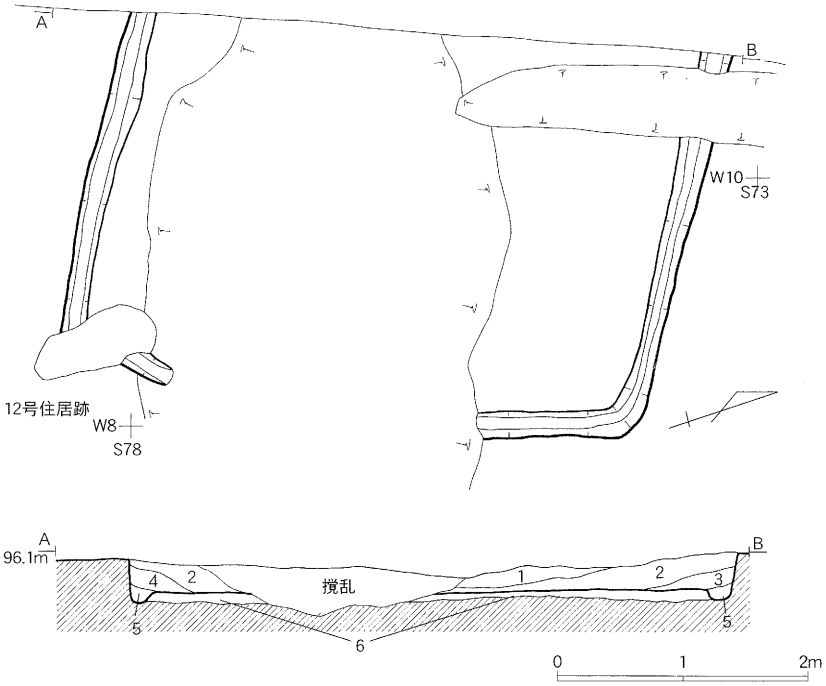
［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い南辺部で２０cmである。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。

［柱穴］検出されなかった。

［周溝］撹乱により東辺が一部破壊されているが、全周すると考えられる。幅１４～２０cm、深さ８～１２cm。

［遺物］出土していない。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR２/１ 黒	シ ル ト	地山粒含む
2	10YR３/２ 黒 褐 色	シ ル ト	地山小ブロック含む
3	10YR３/３ 暗 褐 色	シ ル ト	地山小ブロック含む
4	10YR３/４ 暗 褐 色	シ ル ト	地山小ブロック・炭化物・焼土含む
5	10YR４/４ 褐 色	シ ル ト	地山ブロック多く含む　周溝埋土
6	10YR４/６ 褐 色	シ ル ト	地山ブロック多く含む　住居堀り方埋土

第18図　第10号竪穴住居跡

第１１号竪穴住居跡（第１９～２２図）

［位置・確認面］Ｓ９３～１０２／Ｗ３～１２の第Ⅲ層上面で確認。

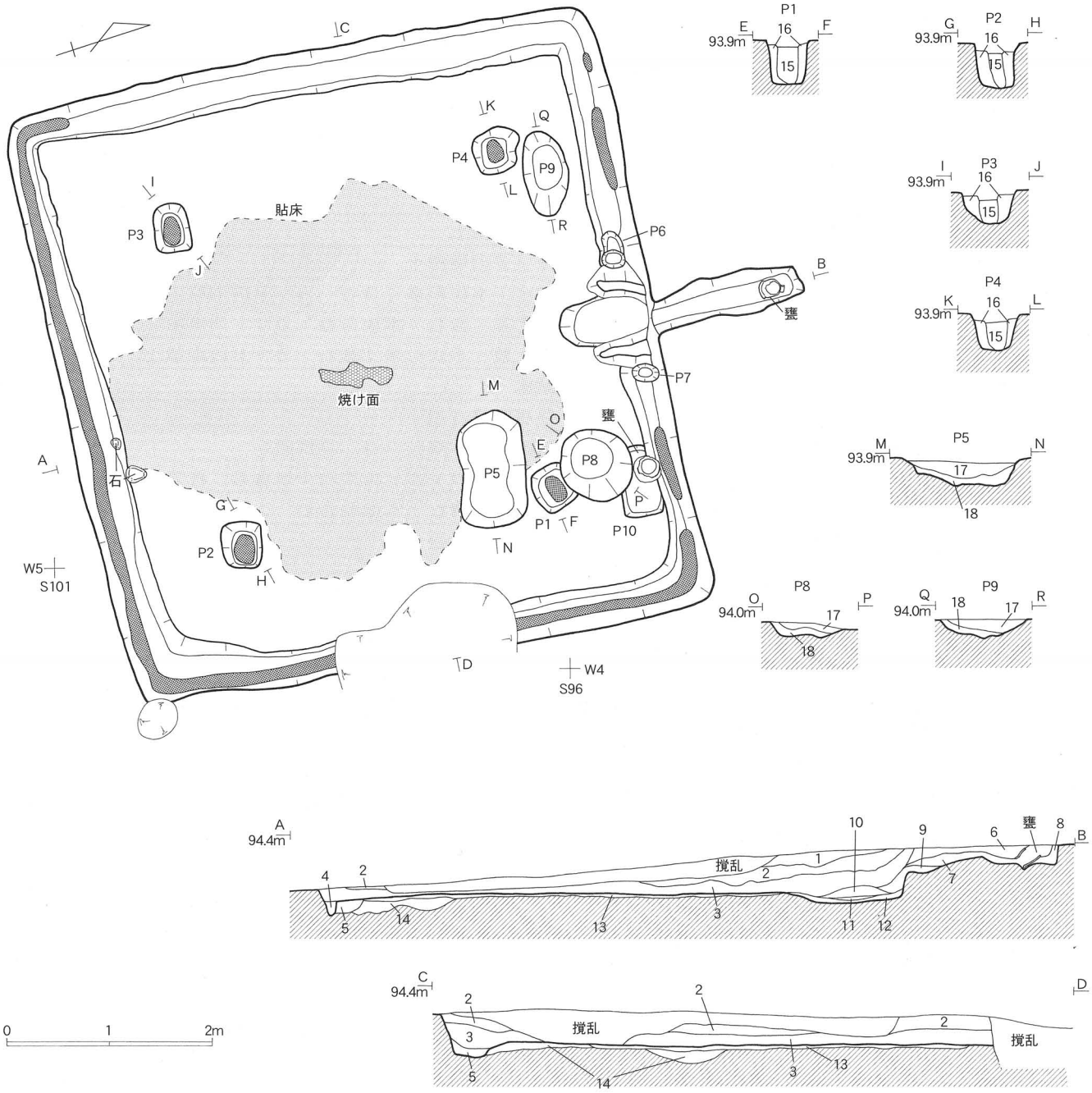
［平面形・規模］東西６ｍ、南北５.８ｍの方形である。

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で５０cmである。

［床］掘り方埋土を床としており平坦である。住居中央部は広範囲に貼床が施されている。

［カマド］住居北壁に設置されており、燃焼部及び煙道が確認された。燃焼部の底面は床面



第19図　第11号竪穴住居跡

を浅く掘りくぼめて形成されており、幅４２cm、奥行８８cm、床面からの深さ８cmである。燃焼部底面の左右に、灰白色粘土で側壁が形成されている。側壁は長さ約５４cm、高さは左２３cm・右３６cmが残存している。煙道は軸長１５２cm、基部幅３４cm、基部深さ２７cmで、底面は基部からゆるやかな上り傾斜となるが、煙道中程でやや急に落ち込み、それより先はほぼ平坦である。煙道先端部から土師器甕（第２０図７）が出土した。この甕は底部を欠き、逆位で据えられていた。煙出しに用いられたと考えられる。

No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	7.5YR 2 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	
2	7.5YR 3 / 3 暗 褐 色	シ ル ト	地山小ブロック含む
3	7.5YR 2 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	焼土・木炭含む
4	7.5YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	壁材痕跡
5	10YR 2 / 3 黒 褐 色	シ ル ト	地山粒少量含む　周溝埋土
6	7.5YR 3 / 4 暗 褐 色	シ ル ト	灰白色粘土粒含む　煙道崩落土？
7	7.5YR 3 / 3 暗 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
8	7.5YR 4 / 4 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
9	5YR 3 / 2 暗 赤 褐 色	シ ル ト	カマド内堆積土
10	7.5YR 3 / 4 暗 褐 色	シ ル ト	焼土・木炭粒多く含む　カマド内堆積土
11	7.5YR 3 / 3 暗 褐 色	シ ル ト	焼土多く含む・木炭含む　カマド内堆積土
12	7.5YR 2 / 1 黒	シ ル ト	焼土粒・木炭粒多く含む　カマド内堆積土
13	10YR 3 / 4 暗 褐 色	シ ル ト	貼床
14	10YR 4 / 6 褐 色	シ ル ト	住居堀り方埋土
15	10YR 2 / 1 黒	シ ル ト	地山粒・木炭粒含む　柱痕跡
16	10YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	地山大ブロック・木炭粒少量含む　柱穴堀り方埋土
17	10YR 3 / 2 黒 褐 色	シ ル ト	白色粘土含む・木炭粒含む
18	10YR 5 / 6 黄 褐 色	シ ル ト	黒褐色土含む

（第19図の土層一覧表）

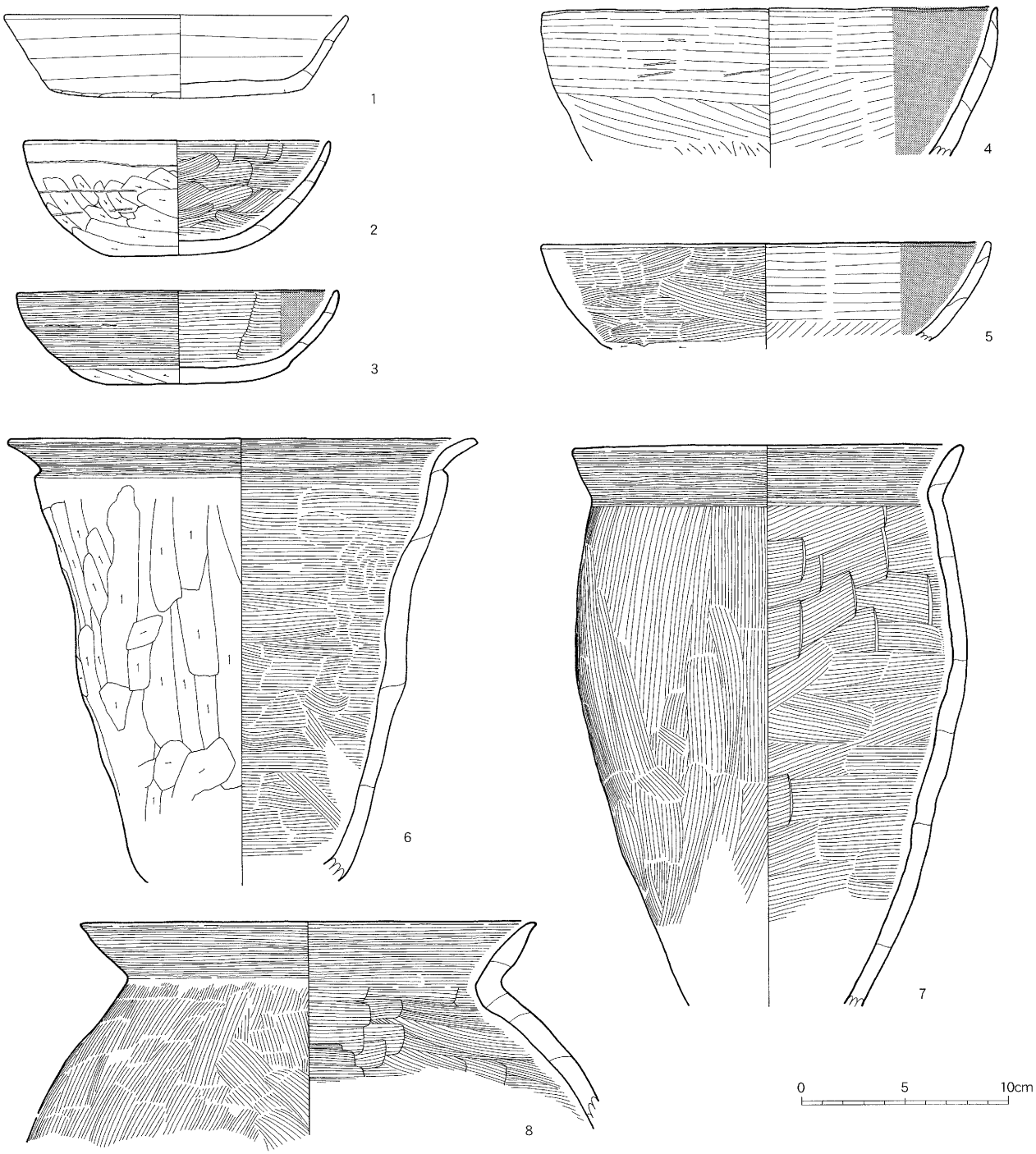
［焼け面］住居中央部に床面が焼けて赤変している部分を検出した。その範囲は７２cm×２４cmの不整長楕円形である。

［柱穴］住居の対角線上から４基のピット（Ｐ１～４）を検出した。これらのピットの平面形は長軸４２～４８cm×短軸３４～４２cmの長方形で、床面からの深さは３７～４６cmである。いずれのピットからも長径２１～２７cm、短径１５～１９cmの楕円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１～４は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

［周溝］カマド部を除き全周する。幅２６～５０cm、深さ５～１９cm。西辺を除く周溝のほぼ全ての範囲から、幅６～１４cm、深さ６～１４cmの壁材痕跡を確認した。

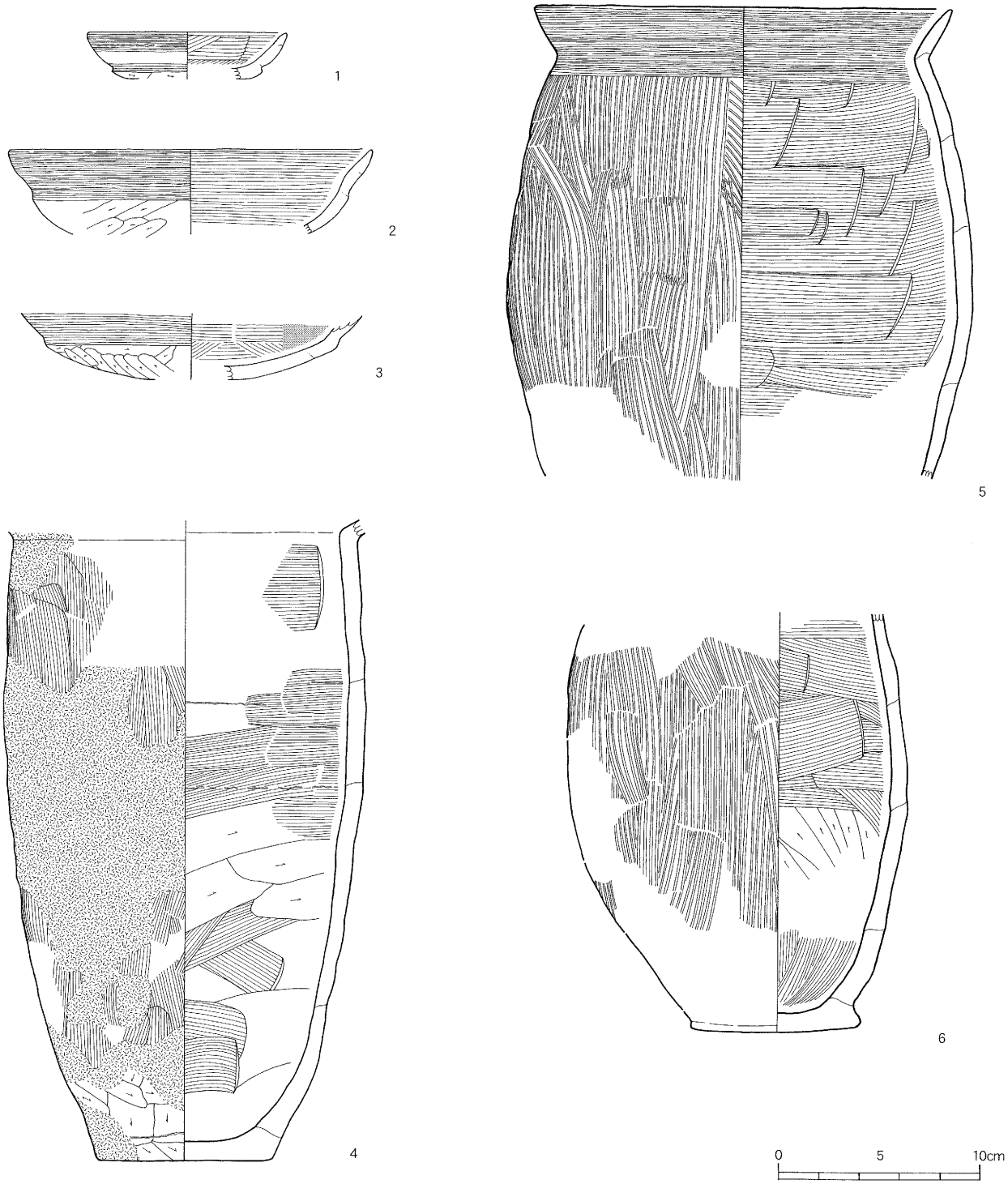
［貯蔵穴］カマド右側の北壁際から１基のピット（Ｐ８）を検出した。Ｐ８の平面形は径約７５cmの円形で、床面からの深さは１３cmである。また、カマド左側の北壁際から１基のピット（Ｐ９）を検出した。Ｐ９の平面形は長径８１cm×短径４５cmの楕円形で、床面からの深さは１４cmである。Ｐ８及びＰ９は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

［その他のピット］周溝内で２基のピット（Ｐ６・７）を検出した。Ｐ６は左カマド側壁の脇に位置し、平面形は径２２cmの円形で周溝底面からの深さは２０cmである。Ｐ７は右カマド側壁の脇に位置し、平面形は長径25cm×短径18cmの楕円形で、周溝底面からの深さは10cmである。P6・7は、その位置からカマドに関係する構造物の痕跡であると考えられる。



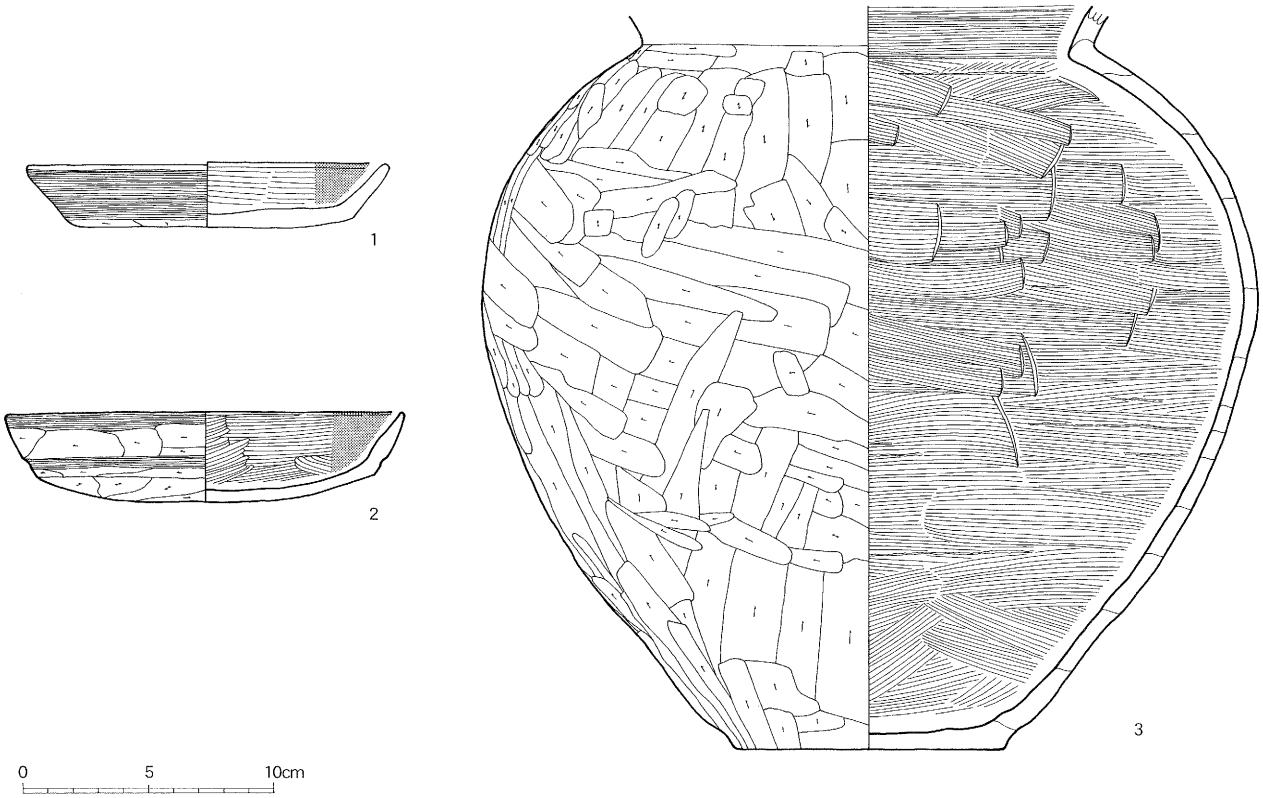
No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	須恵器坏		床	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	16.9	12.4	4	9-9
2	土師器坏		床	ヘラケズリ→ナデ	ヘラナデ		15	—	5.7	9-7
3	土師器坏	坏B2a	カマド側壁	ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	15.7	—	4.5	9-5
4	土師器鉢	坏B1	床・床直	下部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	22.3	—	—	9-8
5	土師器鉢		カマド側壁	ヘラナデ→下部ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	不明	21.9	—	—	9-11
6	土師器甕		床・床直	体部ヘラケズリ　口縁ヨコナデ	ヘラナデ	不明	23.1	—	—	9-13
7	土師器甕	甕B2	煙道ピット	体部ヘラケズリ　口縁ヨコナデ	ヘラナデ	不明	19	—	—	9-14
8	土師器甕	甕B1	P10	体部ヘラケズリ　口縁ヨコナデ	体部ヘラナデ　口縁ヨコナデ	不明	22.3	—	—	10-3

第20図　第11号竪穴住居跡出土遺物（1）



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏	坏B1	カマド内堆積土	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	9.9	—	—	
2	土師器坏		堆積土	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	14.1	—	—	
3	土師器坏		堆積土	ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	—	—	—	
4	土師器甕		床～堆積土	下部ヘラケズリ→体部ヘラナデ	ヘラナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	8.3	—	9-15
5	土師器甕	甕B1	床～堆積土	体部ハケメ→口縁ヨコナデ	体部ヘラナデ→口縁ヨコナデ	不明	20.5	—	—	9-12
6	土師器甕	甕B1	床～堆積土	ハケメ	ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラケズリ	—	8	—	10-1

第21図　第11号竪穴住居跡出土遺物（2）



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏		確認面	ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	14.6	11.1	2.6	9-10
2	土師器坏		確認面	ヘラケズリ→ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	16	—	3.6	9-6
3	土師器甕	甕A2	床～堆積土	ヘラケズリ	体部ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	—	10.8	—	10-2

第22図　第11号竪穴住居跡出土遺物（3）

住居中央やや北東隅よりの位置から１基のピット（Ｐ５）を検出した。Ｐ５の平面形は長軸１０８cm×短軸７２cmの不整長方形で、床面からの深さは３０cmである。

住居北壁際から１基のピット（Ｐ１０）を検出した。Ｐ１０の平面形は長軸６９cm×短軸３９cmの長方形で、床面からの深さは２４cmである。Ｐ１０には土師器甕の上半部（第２０図８）が正位で据えられている。

［遺物］床面・住居堆積土・カマド側壁内部・カマド内堆積土から土師器及び須恵器が、住居堆積土から須恵器が出土した。このうち土師器１７点、須恵器１点が図化できた。同８は住居北壁際に正位で据えられていた土師器甕である。同６は底部が破損しているので確実なことは言えないが、その形状から甑の可能性がある。また、住居床面直上及び堆積土から続縄文土器が、堆積土から不定形石器が出土したが、これらについては「その他の出土遺物」の項にて取り扱う。

第１２号竪穴住居跡（第２３図）

［位置・確認面］Ｓ７５～８４／Ｗ３～１２の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第１０号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

［平面形・規模］北西部を除いて削平により消失しており、また、西・南側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西５.６ｍ以上、南北２.１ｍ以上の方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西辺部で５㎝である。

［床］掘り方埋土を床としている。

［カマド］住居北壁に設置されており、煙道の一部及び煙出しピットが確認された。煙道は残存する範囲の軸長１０４㎝、最大幅４０㎝、深さ１４㎝で、底面は煙出しピット付近で段がつき、高くなる。煙出しピットの平面形は軸径５６㎝×横断径５０㎝の楕円形で、深さは３４㎝である。

［柱穴］住居北壁近くから２基のピット（Ｐ１・２）を検出した。これらのピットの平面形は、Ｐ１が１辺４０㎝の、Ｐ２が１辺５５㎝の方形で、深さは約６０㎝である。いずれのピットからも径１２～２０㎝、円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１・２は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、これらのピットは作り替えが行われており、それぞれの旧ピットから柱痕跡及び抜き取り痕を確認した。

［周溝］住居北部及び西部に残存する。幅１０～１９㎝、深さ１～８㎝。

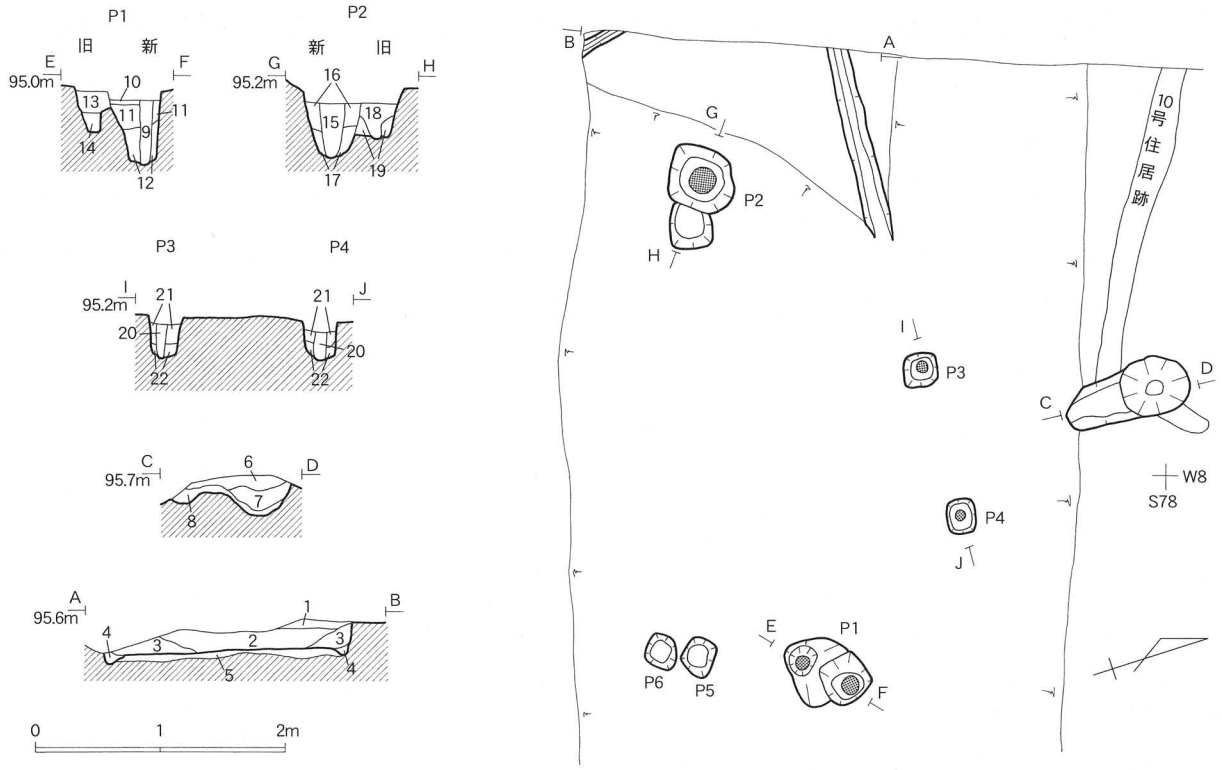
［その他のピット］北辺の延長線上から２基のピット（Ｐ３・４）を検出した。これらのピットの平面形は一辺２７㎝の方形で、深さは３５㎝である。いずれのピットからも径８㎝の円形の柱痕跡を確認した。これらのピットは本来カマド側壁があったと考えられる場所に位置しており、カマドに関係する構造物の痕跡であると考えられる。Ｐ１の南側から２基のピット（Ｐ５・６）を検出した。これらのピットの平面形は１辺２８㎝の方形で、深さは１８㎝である。

［遺物］煙出しピット埋土から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

第１３号竪穴住居跡（第２４図）

［位置・確認面］Ｓ４４～５７／Ｅ３～Ｗ３の第Ⅲ層上面で確認。

［平面形・規模］西辺を除いて撹乱により破壊されているため全体形は不明だが、残存部から東西１ｍ以上、南北３.４ｍ以上の方形を基調とするものと考えられる。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
2	10YR 3/1 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
3	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
4	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	周溝埋土
5	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	住居掘り方埋土
6	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土・木炭粒多く含む　煙道堆積土
7	10YR 2/2 黒褐色	シルト	白色粘土含む・炭化物含む　煙道堆積土
8	7.5YR 4/3 褐色	シルト	地山ブロック多く含む　煙道堆積土
9	10YR 3/3 暗褐色	シルト	柱痕跡
10	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む　柱穴掘り方埋土
11	10YR 4/6 褐色	シルト	地山粒多く含む　柱穴掘り方埋土
12	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む　柱穴掘り方埋土
13	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱抜き取り痕跡
14	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山粒含む　柱痕跡
15	10YR 4/1 褐灰色	シルト	地山粒含む　柱痕跡
16	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴掘り方埋土
17	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴掘り方埋土
18	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック含む　柱抜き取り痕跡
19	10YR 4/4 褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴掘り方埋土
20	10YR 3/3 暗褐色	シルト	柱痕跡
21	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む　柱穴掘り方埋土
22	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む　柱穴掘り方埋土

第23図　第12号竪穴住居跡

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い南西隅部で２０cmである。

［床］第Ⅲ層を床としている。

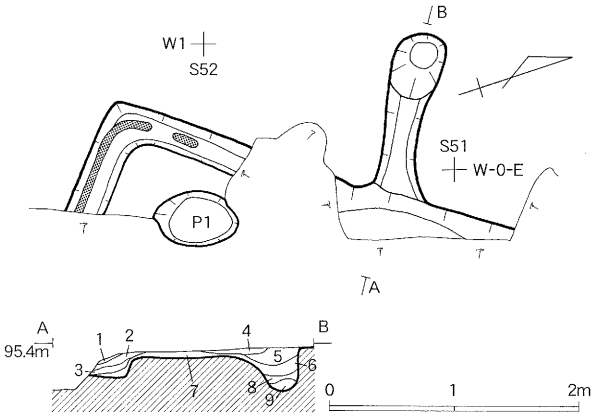
［カマド］住居西壁に設置されており、煙道・煙出しピットが確認された。煙道は軸長１３２cm、基部幅４０cm、基部深さ２cmで、底面はほぼ平坦である。煙出しピットの平面形は軸径５４cm×横断径３８cmの楕円形で、深さは３８cmである。

［柱穴］検出されなかった。

［周溝］南西隅部に残存する。幅２８～３０cm、深さ３～７cm。周溝内の壁側に沿って幅６～８cm、深さ３～５cmの壁材痕跡を確認した。

［貯蔵穴］住居南西部から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は長径７０cm×短径５７cmの楕円形で、床面からの深さは１５cmである。Ｐ１は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

［遺物］住居堆積土から土師器が出土したが、細片のため図示できなかった。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	7.5YR３/３暗褐色	シルト	地山粒含む
2	7.5YR３/４暗褐色	シルト	焼土少量含む
3	7.5YR３/４暗褐色	シルト	地山粒含む
4	7.5YR４/４褐色	シルト	煙道堆積土
5	5YR２/２黒褐色	シルト	焼土・木炭粒多く含む　煙道ピット堆積土
6	7.5YR３/４暗褐色	シルト	木炭粒含む　煙道ピット堆積土
7	7.5YR４/６褐色	シルト	カマド・煙道堆積土
8	5YR２/３極暗赤褐色	シルト	木炭粒少量含む　煙道ピット堆積土
9	10YR４/６褐色	シルト	煙道ピット堆積土

第24図　第13号竪穴住居跡

第１４号竪穴住居跡（第２５・２６図）

［位置・確認面］Ｓ６０～６９・Ｗ０～６の第Ⅲ層上面で確認。

［平面形・規模］南東隅部が撹乱により破壊されているが残存部から一辺３.８ｍの方形であると考えられる。

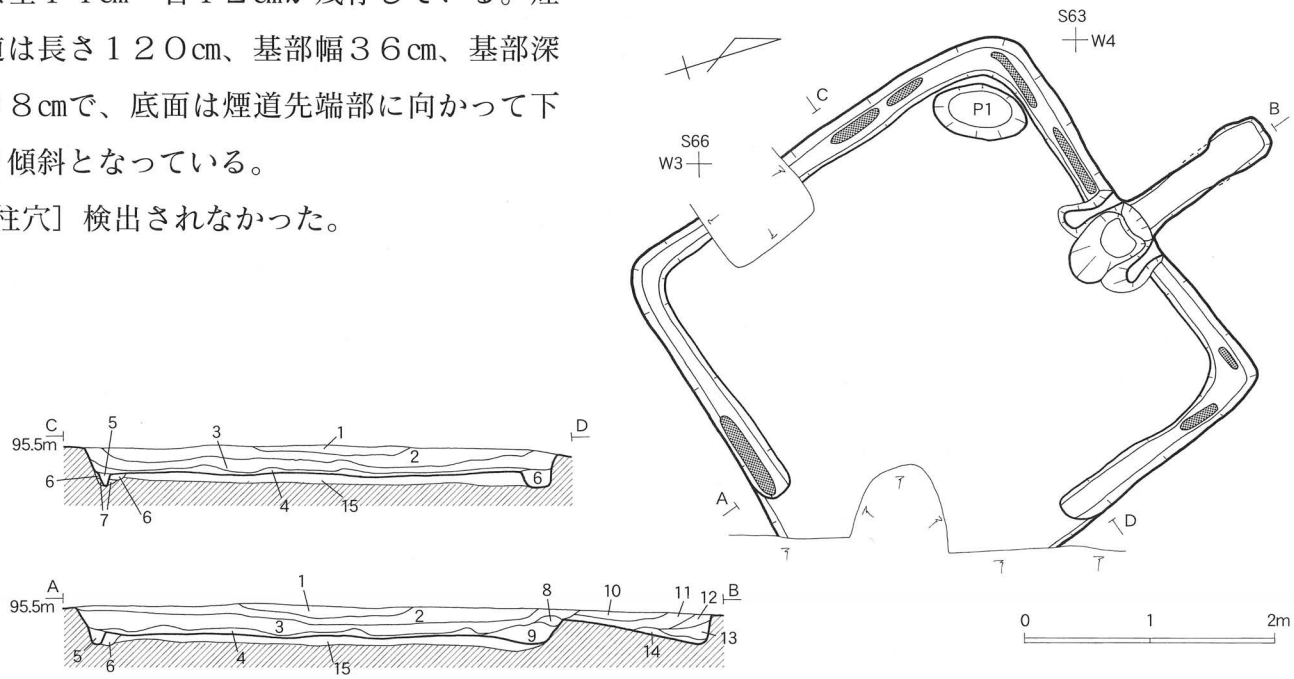
［堆積土］４層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、若干開き気味に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西辺部で２２cmである。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。

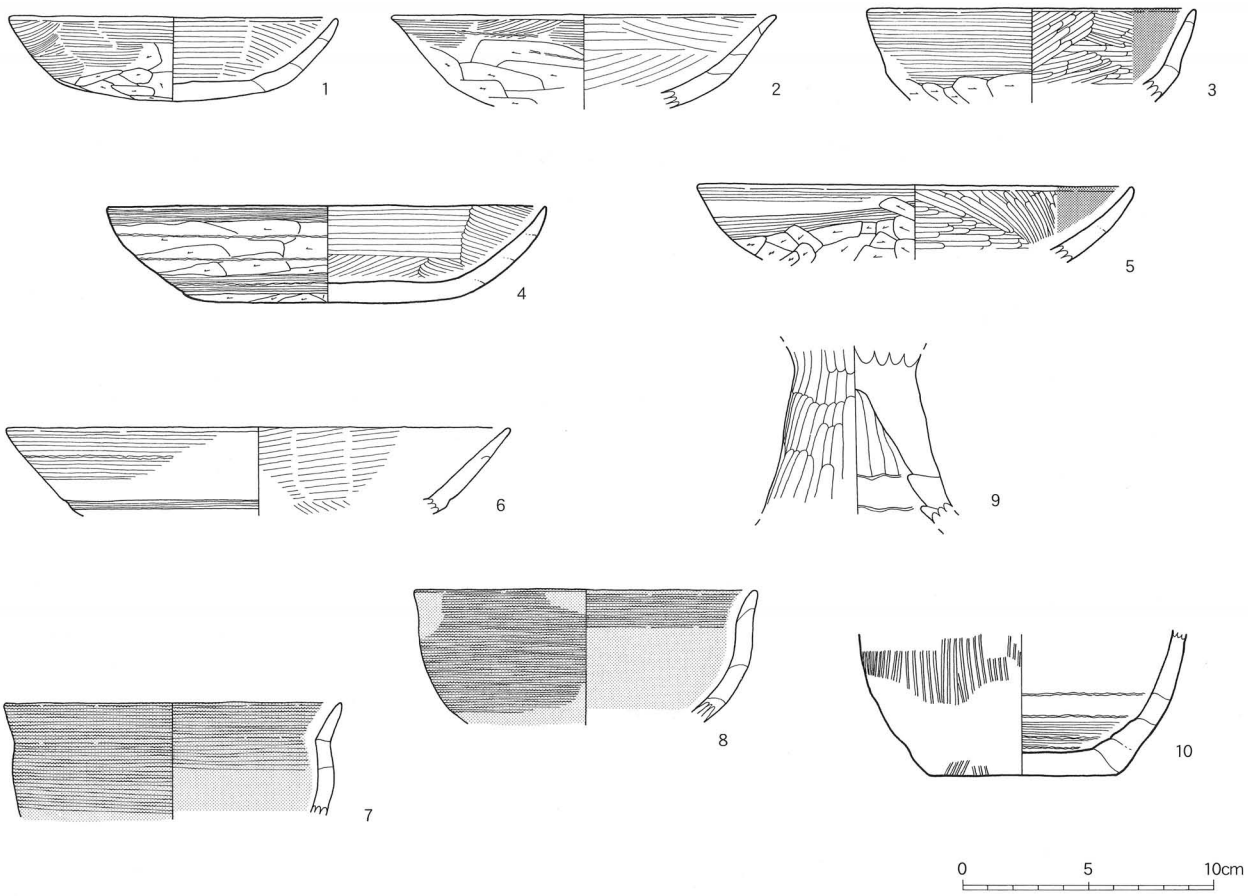
［カマド］住居北壁に設置されており、燃焼部及び煙道が確認された。燃焼部の底面は床面を浅く掘りくぼめて形成しており、幅４８cm、奥行７２cm、床面からの深さ６cmである。燃焼部底面の左右に、灰白色粘土で側壁が形成されている。側壁は長さ約５６cm、高さは左１４cm・右１２cmが残存している。煙道は長さ１２０cm、基部幅３６cm、基部深さ８cmで、底面は煙道先端部に向かって下り傾斜となっている。

［柱穴］検出されなかった。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR２/２ 黒 褐 色	シ ル ト	
2	10YR３/２ 黒 褐 色	シ ル ト	
3	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	
4	10YR３/３ 暗 褐 色	シ ル ト	
5	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	
6	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	地山ブロック含む　周溝埋土
7	10YR４/６ 褐 色	シ ル ト	周溝埋土
8	10YR３/２ 黒 褐 色	シ ル ト	カマド内堆積土
9	5YR３/４ 暗 赤 褐 色	シ ル ト	焼土多く含む　カマド内堆積土
10	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
11	10YR３/２ 黒 褐 色	シ ル ト	焼土･地山粒少量含む　煙道堆積土
12	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
13	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	焼土･地山粒多く含む　煙道堆積土
14	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	地山粒多く含む　住居掘り方埋土
15	10YR４/１ 褐 灰 色	シ ル ト	地山粒含む　柱痕跡

第25図　第14号竪穴住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏	坏Ｂ２ａ	床	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	13.6	－	3.4	10-6
2	土師器坏		堆積土	ヘラナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	15.5	－	－	
3	土師器坏		堆積土	ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	不明	13.2	－	－	
4	土師器坏	坏Ｂ１	床・カマド側壁	ヘラケズリ→ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	17.6	10.8	3.8	10-7
5	土師器坏		確認面	ヘラケズリ・ナデ→ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	不明	17.5	－	－	
6	土師器坏	坏Ｂ１	床直	ナデ	ヘラミガキ→黒色処理	不明	20.2	－	－	
7	土師器坏		堆積土	ヨコナデ→朱彩	ハケメ→ヨコナデ→朱彩	不明	13.5	－	－	
8	土師器坏		堆積土	ヨコナデ→朱彩	ナデ→口縁ヨコナデ→朱彩	不明	13.8	－	－	10-5
9	土師器高坏		堆積土	ヘラミガキ	受け部：不明	脚部内面：ヘラオサエ	－	－	－	10-4
10	土師器甕	甕Ｂ１	床	ハケメ	ヘラナデ	ヘラケズリ	－	7.6	－	

第26図　第14号竪穴住居跡出土遺物

［周溝］住居南東部を除き全周する。幅１１～２８㎝、深さ６～１８㎝。周溝内から断続的に幅５～８㎝、深さ約７㎝の壁材痕跡を確認した。左右のカマド側壁を除去した段階で、周溝はカマド側壁の直下まで及んでいることを確認した。また、左カマド側壁直下の周溝底面から、直径約２０㎝のピットが検出された。

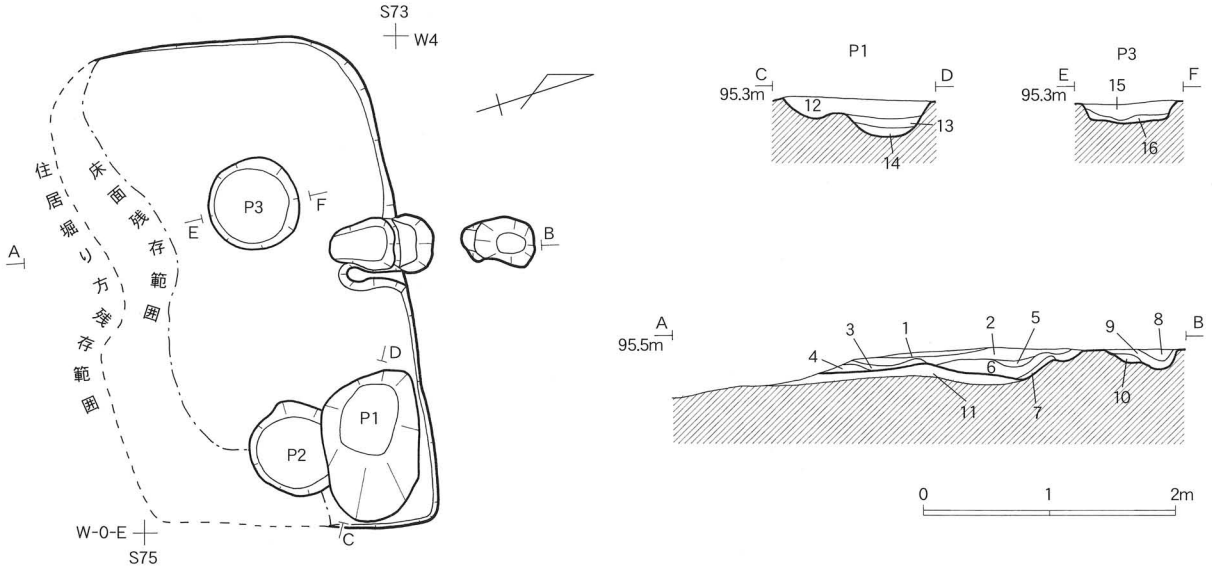
［貯蔵穴］住居北西隅部から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は長径７６㎝×短径４６㎝の楕円形である。Ｐ１は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

［遺物］床面・住居堆積土・カマド側壁内部から土師器が、住居堆積土から須恵器が出土した。土師器は１０点を図化できた。第２６図１は床から出土した土師器坏である。また、床面直上から土師器坏（同６）が、住居床面及びカマド側壁を構成する灰白色粘土の中から土師器坏（同４）が出土した。

第１５号竪穴住居跡（第２７・２８図）

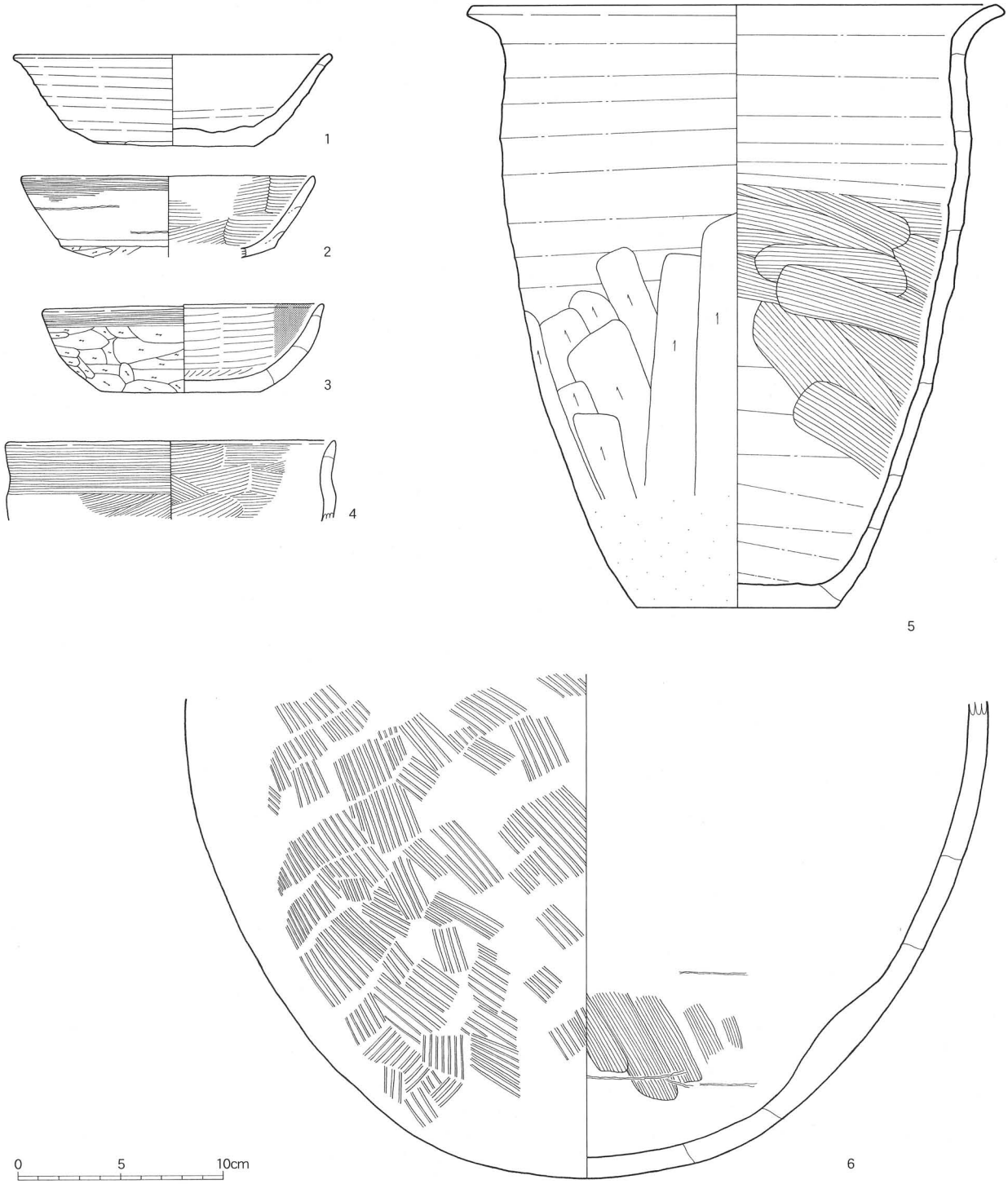
［位置・確認面］Ｓ６９～７８／ＷＯ～６の第Ⅲ層上面で確認。

［平面形・規模］南部が削平により消失しているため全体形は不明だが、残存部から東西４．１ｍ、南北２．６ｍ以上の隅丸方形を基調とするものと考えられる。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	
2	10YR３/４ 暗 褐 色	シ ル ト	焼土･木炭･炭化物多く含む
3	10YR３/４ 暗 褐 色	シ ル ト	
4	10YR４/６ 褐 色	シ ル ト	
5	7.5YR３/４ 暗 褐 色	シ ル ト	焼土･粘土多く含む
6	10YR３/３ 暗 褐 色	シ ル ト	
7	10YR４/６ 褐 色	シ ル ト	
8	10YR２/３ 黒 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
9	10YR３/２ 黒 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
10	7.5YR４/４ 褐 色	シ ル ト	煙道堆積土
11	10YR３/３ 暗 褐 色	シ ル ト	地山土多く含む　住居掘り方埋土
12	5YR３/４ 暗 赤 褐 色	シルト	地山粒・木炭粒含む
13	5YR ４/２ 灰 褐 色	粘土質シルト	
14	10YR７/４ にぶい黄橙色	粘 土	
15	5YR ２/４ 極 暗 赤 褐 色	シ ル ト	焼土粒少量含む
16	7.5YR３/４ 暗 褐 色	シ ル ト	

第27図　第15号竪穴住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	須恵器坏		堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ	15.6	8.6	4.5	10-9
2	土師器坏		堆積土	ナデ	ヘラミガキ	不明	10.4	—	—	
3	土師器坏		確認面	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	13.7	8	4.3	10-8
4	土師器鉢		堆積土	体部ヘラナデ→口縁ヨコナデ	体部ヘラナデ　口縁ナデ	不明	16.2	—	—	
5	土師器甕	甕C	床	ロクロナデ→下部ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラナデ	ヘラケズリ	24	9.8	29.8	10-10
6	須恵器甕		床	平行タタキ	ヘラナデ	—	—	—	—	10-11

第28図　第15号竪穴住居跡出土遺物

［堆積土］７層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で１５cmである。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。

［カマド］住居北壁に設置されており、燃焼部・煙道の基部及び先端部・煙出しピットが確認された。燃焼部の底面は床面を浅く掘りくぼめて形成しており、幅４２cm、奥行５２cm、床面からの深さ３cmである。燃焼部底面の右に灰白色粘土で側壁が形成されている。側壁は長さ約５０cm、高さ１３cmが残存している。煙道は軸長１１４cm、基部幅４４cm、基部深さ９cmで、残存状態から、底面は基部から中央部までは上り傾斜で、中央部から先端部までは下り傾斜であったと考えられる。煙出しピットの平面形は軸径５７cm×横断径３８cmの不整楕円形で、深さは１６cmである。

［柱穴］検出されなかった。

［貯蔵穴］住居北東隅部から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は長径１２２cm×短径７６cmの不整楕円形で、床面からの深さは２１cmである。Ｐ１は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

［その他のピット］住居中央やや北寄りから１基のピット（Ｐ２）を検出した。Ｐ２の平面形は径７２cmの円形で、床面からの深さは２３cmである。

［遺物］床面・住居堆積土から土師器・須恵器が出土した。土師器４点と須恵器２点を図化できた。土師器甕及び須恵器甕（第２８図５・６）はＰ１埋土の直上から出土したもので、２個が並んで置かれていたと考えられる。

第１６号竪穴住居跡（第２９図）

［位置・確認面］Ｓ９６～１０２／Ｅ３～Ｗ３の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第１７号竪穴住居跡と重複し、これより古い。

［平面形・規模］東部が撹乱により、また、南西部が第１７号竪穴住居跡により破壊されており、北西隅部以外残存していないため全体形は不明だが、残存部から一辺２.３ｍ以上の方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］３層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で１７cmである。

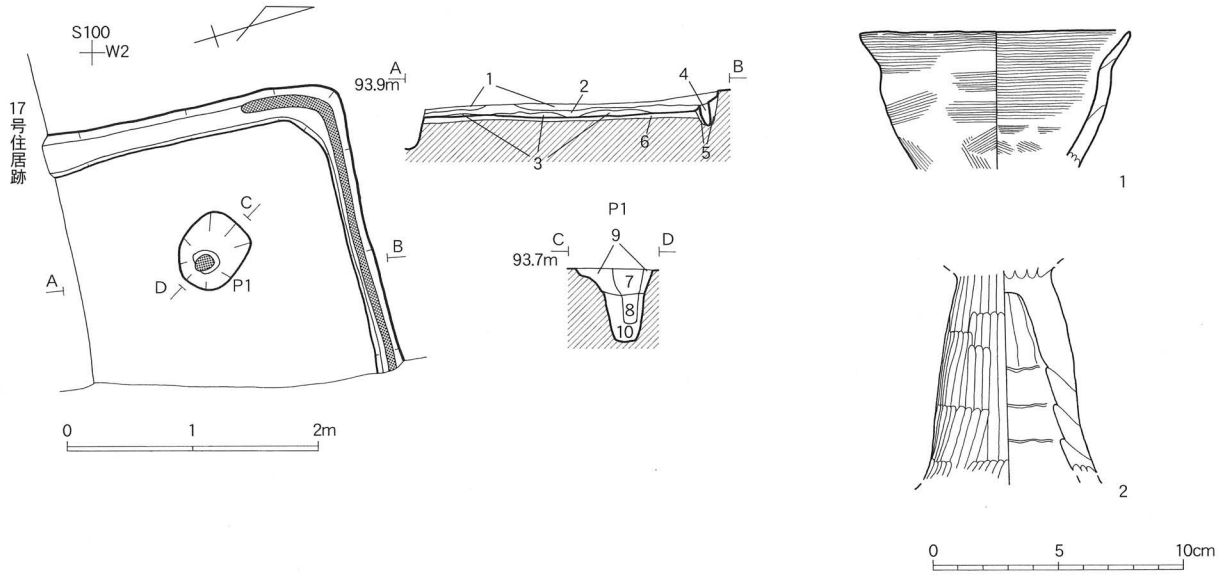
［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。

［柱穴］北西隅部付近から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は長軸６０cm×短軸５０cmの不整長方形で、床面からの深さは５８cmである。Ｐ１内から径１４cmの円形の

柱痕跡を確認した。Ｐ１は位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、Ｐ１には柱材の抜き取り痕跡が認められる。

［周溝］住居残存範囲を全周する。幅１５～２６㎝、深さ８～１６㎝。周溝の北西隅部から北辺部にかけての範囲から、幅６～９㎝、深さ８～１２㎝の壁材痕跡を確認した。

［遺物］住居堆積土から土師器・須恵器が出土した。確認面出土の土師器鉢（第29図１）及び、土師器高坏（同２）の２点を図化できた。鉢は強い火熱を受けたのか、赤変している。



No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR３／３暗褐色	シルト	
2	10YR３／４暗褐色	シルト	
3	10YR４／６褐色	シルト	
4	7.5YR３／３暗褐色	シルト	壁材痕跡
5	10YR３／４暗褐色	シルト	周溝埋土
6	10YR４／６褐色	シルト	住居掘り方埋土
7	10YR３／２黒褐色	シルト	地山粒少量含む　柱抜き取り痕跡
8	10YR３／３暗褐色	シルト	地山粒多く含む　柱痕跡
9	10YR５／６黄褐色	シルト	柱穴掘り方埋土
10	10YR４／６褐色	シルト	柱穴掘り方埋土

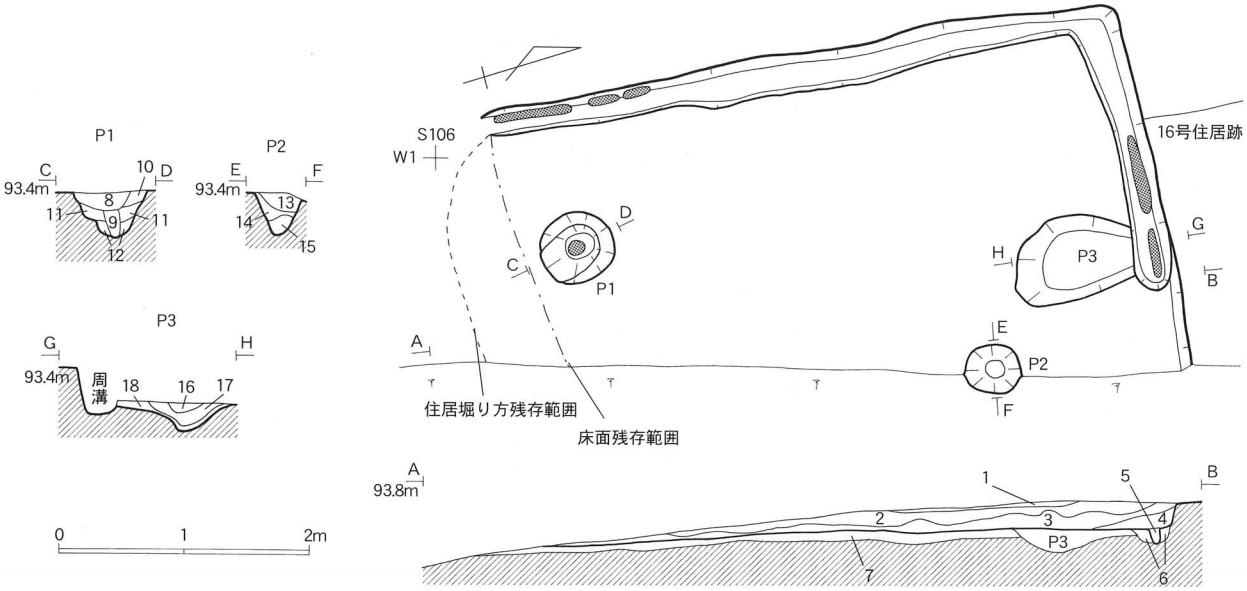
No.	器種別	層　位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底面	器高	図版
1	土師器鉢	確認面	ナデ→口縁ヨコナデ	ヨコナデ	不　明	10.8	－	－	
2	土師器高坏	確認面	ヘラミガキ	受け部:不　明	脚部内面:ヘラオサエ	－	－	－	10-12

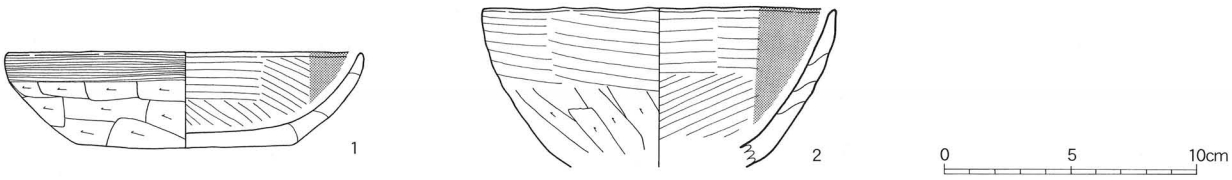
第29図　第16号竪穴住居跡と出土遺物

第１７号竪穴住居跡（第３０図）

［位置・確認面］Ｓ９９～１０８／Ｅ３～Ｗ３の第Ⅲ層上面で確認。

［重複］第１６号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。





No.	土　　色	土　　質	備　　考
1	10YR 3 / 2 黒褐色	シルト	
2	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山粒少量含む
3	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	地山粒含む
4	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山粒・白色粘土少量含む
5	7.5YR 3 / 3 暗褐色	シルト	壁材痕跡
6	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	周溝埋土
7	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	住居掘り方埋土
8	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	柱抜き取り痕跡
9	7.5YR 4 / 3 褐色	シルト	柱痕跡
10	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山土少量含む　柱穴掘り方埋土
11	10YR 4 / 6 褐色	シルト	柱穴掘り方埋土
12	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	柱穴掘り方埋土
13	7.5YR 4 / 4 褐色	シルト	
14	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	焼土粒少量含む
15	7.5YR 5 / 4 にぶい褐色	シルト	
16	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山粒多く含む
17	10YR 4 / 6 褐色	シルト	
18	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	

No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器坏	杯B2b	床直	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	14.5	8.7	3.9	10-13
2	土師器鉢		床直	ヘラケズリ→口縁ヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理	不明	14.2	—	—	10-14

第30図　第17号竪穴住居跡と出土遺物

［平面形・規模］東部が撹乱により破壊されており、南西部のみ残存する。残存部から東西３ｍ以上、南北５.１ｍ以上の方形を基調とするものと考えられる。

［堆積土］４層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

［壁］第Ⅲ層及び第１６号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で３５㎝である。

［床］掘り方埋土を床としており、平坦である。

［柱穴］南西部から１基のピット（Ｐ１）を検出した。Ｐ１の平面形は一辺５８㎝の隅丸方形で、床面からの深さは４４㎝である。Ｐ１内から径１２㎝の円形の柱痕跡を確認した。Ｐ１は位置・形状･規模から主柱穴と考えられる。Ｐ１には柱材の抜き取り痕跡が認められる。

［周溝］北辺の一部を除き住居残存範囲を全周する。幅２０～３４㎝、深さ１０～１２㎝。北辺部及び西辺部の周溝内から、断続的に幅６～９㎝、深さ８～１２㎝の壁材痕跡を確認した。

［その他のピット］住居北辺部から１基のピット（Ｐ２）を検出した。Ｐ２の平面形は径４３㎝の円形で、床面からの深さは４０㎝である。

住居北壁際から１基のピット（Ｐ３）を検出した。Ｐ３の平面形は長径９８㎝×短径６８㎝の不整楕円形で、床面からの深さは１２㎝である。

［遺物］床面直上・住居堆積土から土師器が出土し、床面直上出土の坏（第３０図１）・鉢（同２）の２点を図化できた。

第２節　その他の出土遺物（第３１～３３図）

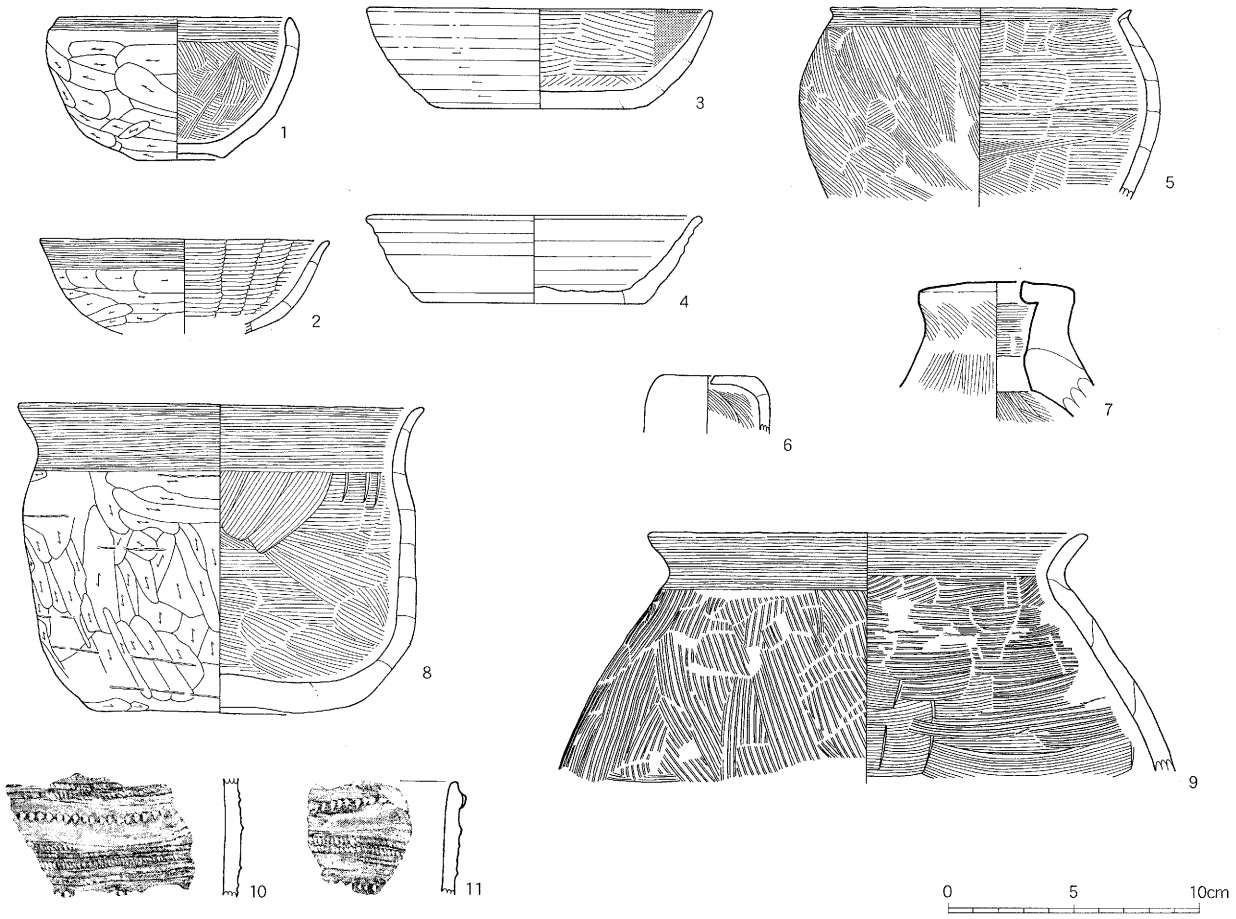
第３１図１・８は第Ⅱ層から出土した土師器椀（１）及び鉢（８）である。同２～６は第Ⅰ層から出土した土師器坏（２・３）、鉢（５）、須恵器坏（４）、土師器蓋？（６）である。同７・９は、撹乱から出土した土師器炉器台（７）、土師器甕（９）である。

同１０・１１は、第１１号竪穴住居跡の床面直上及び堆積土から出土した続縄文土器で、器種は不明だが同一個体の破片と考えられる。細かい刺突文と複数の微隆起線文がみられ、こうした特長からこの土器は後北Ｃ２－Ｄ式に相当するものと考えられる。なお、これらの破片の胎土には海綿骨針が含まれているが、これは本遺跡のその他の土器には見られない特徴である。

第３２図１～１６は、遺構内外から出土した弥生土器の破片である。第３２図３は3本一組の平行沈線によって、波状の文様を描いている。同１１も同様な文様構成であるが、前者の沈線が1本ずつ描かれているのに対して、後者は櫛歯状の施文具で1度に描かれている。これらはその文様的特徴から弥生時代中期、十三塚式のものであると考えられる。同1及び2は同一個体と考えられ、複合口縁の下端に押圧文を施し、その上に5条の沈線文を平行に施して

いる。また、同5は口唇部に縄文を施し、複合口縁の下端に押圧文を施している。これらはその文様的特徴から弥生時代後期、天王山式のものであると考えられる。

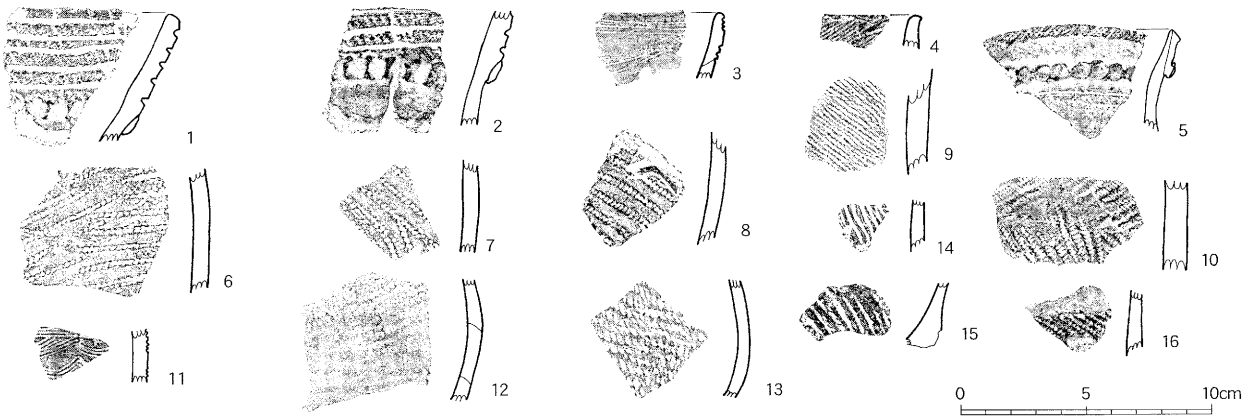
第33図1及び2は撹乱出土の須恵器破片で、器種は甕と考えられる。これらの破片は、割れ口が磨耗しているのが観察された(網点部)。本来の器が破損した後、破片を砥石として転用したものと考えられる。

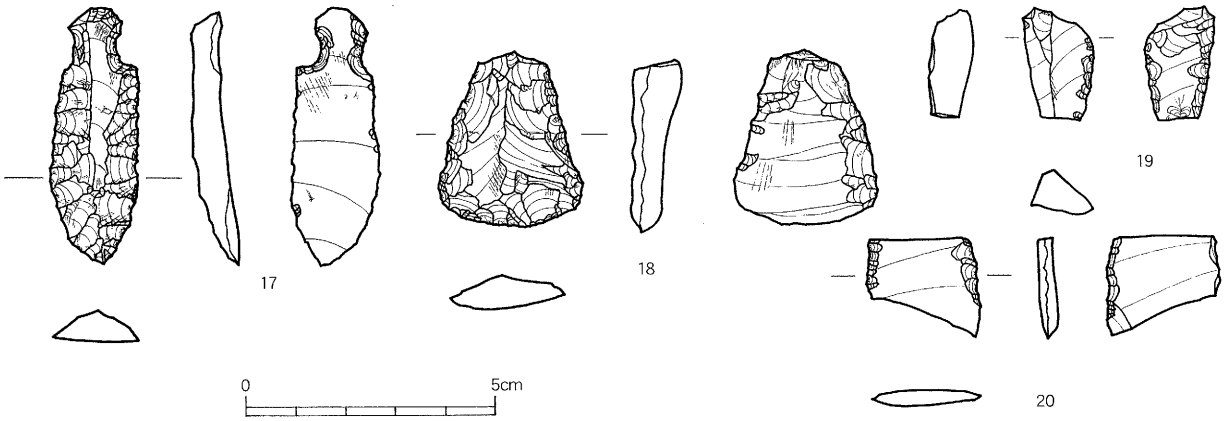


No.	器種別	層　位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	図版
1	土師器椀	第II層	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	10	3.4	5.7	11-4
2	土師器坏	第I層	ロクロケズリ→ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラ切り→ヘラケズリ	13.9	8.8	4.1	
3	土師器坏	第I層	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ヘラミガキ	不明	11.5	—	—	11-2
4	須恵器坏	第I層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	13.4	9.1	3.5	11-1
5	土師器鉢	第I層	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	不明	12	—	—	11-3
6	土師器蓋？	第I層	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
7	土師器炉器台	撹乱	ナデ	受け部:ヘラナデ	脚部内面:ヘラナデ	6.7	—	—	11-5
8	土師器鉢	第II層	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	16.2	11.5	12.4	11-7
9	土師器甕	撹乱	体部ハケメ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ→口縁ヨコナデ	不明	17.5	—	—	11-6

No.	器種別	層　位	文　様	図版
10	続縄文土器	11住床直	刺突文・微隆起線文	11-8
11	続縄文土器	11住堆積土	刺突文・微隆起線文	11-9

第31図　その他の出土遺物（1）

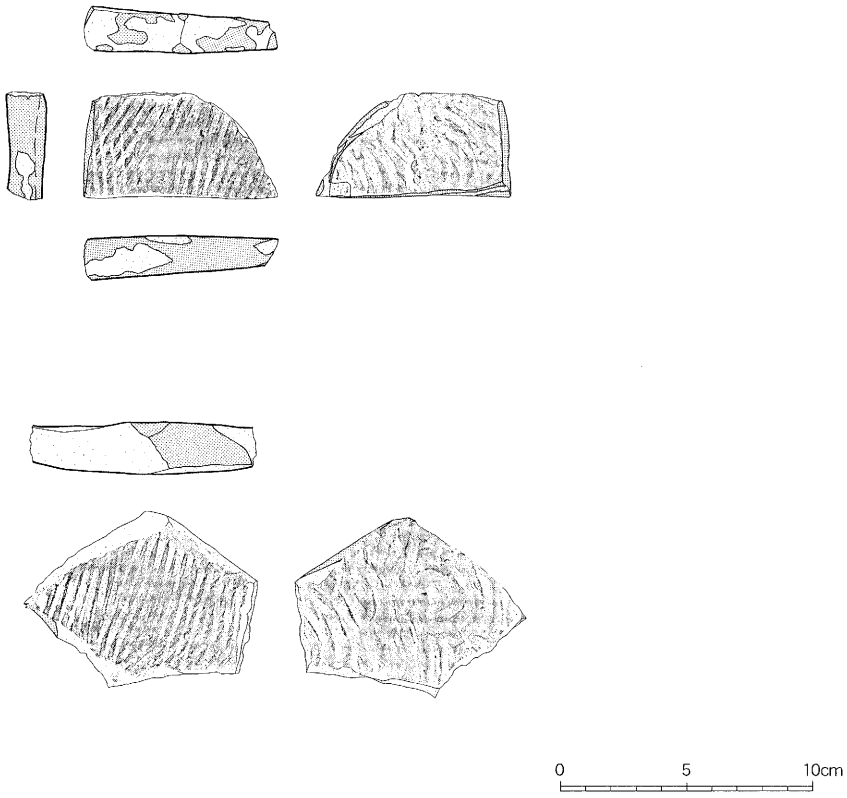




No.	器種別	層　位	文　様	図版
1	弥生土器	B区撹乱	複合口縁　RL縄文→沈線文　押圧文	11-11
2	弥生土器	5住堆積土	RL縄文→沈線文　押圧文	11-12
3	弥生土器	出土地不明	平行沈線文（1本描き3本組）	11-14
4	弥生土器	5住堆積土	撚糸文ｒ	
5	弥生土器	表土	口唇部LR縄文　押圧文	11-10
6	弥生土器	B区撹乱	ＬＲ縄文	
7	弥生土器	B区撹乱	ＬＲ縄文	
8	弥生土器	8住確認面	ＬＲ縄文	
9	弥生土器	B区撹乱	撚糸文ｒ	
10	弥生土器	出土地不明	ＬＲ縄文	
11	弥生土器	4住確認面	平行沈線文（櫛歯状工具による同時施文）	11-13
12	弥生土器	11住堆積土	ＬＲ縄文	
13	弥生土器	B区撹乱	RL縄文	
14	弥生土器	B区撹乱	撚糸文ｒ	
15	弥生土器	B区表採	撚糸文ｒ	
16	弥生土器	7住P4堆積土	RL縄文	

No.	器種別	層　位	材　質	全長	全幅	厚さ	備　考	図版
17	石匙	表土	頁岩	5.2	1.8	0.7		11-16
18	篦状石器	B区撹乱		3.7	2.9	1		11-17
19	不定形石器	B区撹乱	チャート	2.3	1.3	0.9		
20	不定形石器	11住堆積土	頁岩	2.1	2.3	0.4		

第32図　その他の出土遺物（2）



No.	器種別	層　位	文　様	図版
1	須恵器甕？	B区撹乱	外面：平行タタキ　内面：押え具痕（同心円）　磨耗痕（網点部）	
2	須恵器甕？	B区撹乱	外面：平行タタキ　内面：押え具痕（同心円）　磨耗痕（網点部）	

第33図　その他の出土遺物（3）

第4章　考　　察

今回検出された遺構は竪穴住居跡が１７軒である。また、遺構の内外から遺物が出土した。ここでは主に住居跡に伴うと考えられる遺物の編年的位置付けと、検出された竪穴住居跡の機能時期と特徴について若干の考察を加える。ただし、検出された住居跡は後世の撹乱を強く受けているために全容が判明しないものが多く、遺物の器種構成や比率についても、信頼性の高い情報は得られ難いものと考えられる。この点も考慮した上で考察を進めていきたい。

第１節　出土遺物の考察

１７軒の竪穴住居跡の中で、床面、あるいは貯蔵穴などからその住居に伴うと考えられる状態で遺物が出土したのは第３・５・６・１１・１４・１５・１７号住居跡の７軒である。ここではまず、各住居跡に伴うと考えられる遺物を器種毎に分類した上で、一定のまとまりによって土器群を設定し、その編年的位置付けを考えていくこととする。

１　分　　類

上記した７軒の竪穴住居に伴うと考えられる遺物は土師器坏・高坏・鉢・椀・器台・壺・甕・台付甕・甑、須恵器坏・甕である。以下、器種毎に分類する。

○土師器

〔坏〕いずれもその製作に際してロクロを使用していない。比較的器高の高いもの（坏Ａ）と、低いもの（坏Ｂ）に大別される。

坏Ａ：底部が残存するものはいずれも平底で、口径に対して底径が著しく小さい。体部と口縁部の境目に段あるいは屈曲を持つが、その位置が器高の中ほどより上にあるもの（坏Ａ１）と、器高のほぼ中ほどにあるもの（坏Ａ２）、きわめてゆるやかな段が器高の中間より上にあるもの（坏Ａ３）に細分される。口縁部の形状は、坏Ａ１は内湾気味に外傾する。坏Ａ２は外反気味に外傾し、口唇部が厚い。坏Ａ３は直線的に外傾する。器面調整はいずれもヘラミガキだが、坏Ａ３は他に比較してやや粗雑である。

坏Ｂ：外面の底部と体部の境目に段あるいは沈線が巡るもの（坏Ｂ１）と、巡らないもの（坏Ｂ２）に細分される。坏Ｂ１はいずれも内面に段や稜は見られず、底部は判明しているものは平底風の丸底で、ヘラケズリによって整形されている。体部はわずかに内湾気味のもの、直線的に外傾するものがある。内面の調整はいずれもヘラミガキで、黒色処理が施されるものもある。坏Ｂ２はいずれも体部は内湾気味に立ち上がり、器面調整は体部外面下半がヘラケズリ、上半がナデである。内面の調整はヘラミガキあるいはナデで、さらに底部形状が平底風の丸底のもの（坏Ｂ２ａ）、平底のもの（坏Ｂ２ｂ）に分けられる。

〔高坏〕１点のみ出土している。小型で、坏部はゆるやかに外傾し、口唇部が外方につまみ出されている。脚部は円錐台状で、透孔が３個設けられている。器面調整は丁寧なヘラミガキで、口縁部と脚部上半に朱彩が施されている。

〔鉢〕比較的大型の、器高の高い坏状の器形を呈するもので、器面調整は外面下半がヘラケズリ、上半が横位のヘラケズリまたはヘラナデである。内面はいずれもヘラミガキの後黒色処理を施している。

〔椀〕１点のみ出土している。平底で、体部は内湾気味に立ち上がる。器面調整は内外ともヘラミガキである。

〔器台〕全体形の判明するもの４点、脚部のみのもの２点がある。脚部がゆるやかに外反しつつ裾が広がるもの（器台Ａ）と、円錐台状のもの（器台Ｂ）とに大別される。

器台Ａ：全体形のわかるものの受け部は脚部との境に段を持たず、ゆるやかに内湾する。いずれも受け部から脚部にかけての貫通孔を有する。器面調整はいずれも非常に丁寧なヘラミガキで、朱彩が施されている。透孔は６個のものと４個のものがある。

器台Ｂ：全体形のわかるものの受け部は、脚部との境が有段のものと無段のものがある。貫通孔はあるものが１点、ないものが３点である。器面調整はヘラミガキで、朱彩を施されているものが２点ある。透孔は３個のものが１点、２個のものが１点、透孔の無いものが２点である。

〔壺〕大型のもの（壺Ａ）と、小型のもの（壺Ｂ）に大別される。

壺Ａ：４点出土しているが全体形のわかるものはなく、底部から体部にかけてのみのものが３点、口縁部のみのものが１点である。前者はいずれも体部が膨らむ器形で、器面調整は外面がヘラミガキ、内面がヘラナデあるいはヘラミガキである。朱彩を施しているものが２点ある。口縁部のみのものは複合口縁で、外面は頸部との境に段を有するが、内面は無段で頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。器面調整はヘラミガキである。

壺Ｂ：２点が出土しており、うち全体形のわかるものは１点である。体部の形状はいずれも球形で、口縁部の形態は、厚めで、外反し短いもの（壺Ｂ１）と、やや中膨らみ気味に外傾し、長いもの（壺Ｂ２）に細分される。器面調整は内外面ともヘラミガキである。

〔甕〕ロクロ未使用で体部が球状に膨らむもの（甕Ａ）、ロクロ未使用で長胴形のもの（甕Ｂ）、ロクロを使用し、長胴形のもの（甕Ｃ）に大別される。

甕Ａ：さらに口径１０～１５㎝程度の中形品（甕Ａ１）と、口径２０㎝以上の大形品（甕Ａ２）に細分される。甕Ａ１は、全体形の判明しているものが１点、口縁部から体部上半のものが１点である。前者は口径と比較して底径が小さく、最大径は体部中間よりやや下方にある。口縁部は外反する。後者は、口縁部はやや厚めで直線的に外傾する。器面調整調整はいずれも体部は内外ともヘラナデ、口縁部は内外ともヨコナデである。甕Ａ２は、

口縁部から体部上半のみのものが１点、口縁部のみ欠損しているものが１点である。前者は、口縁部は厚く、外傾する。器面調整は体部外面が縦位の、内面が横位のヘラナデ、口縁部は内外ともヨコナデである。後者は底部から体部が直線的に外傾し、体部中間あたりで湾曲してすぼまり、最大径は体部中間よりやや上方にある。器面調整は体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

甕Ｂ：全体形の判明するものはないが、体部形状がやや中膨らみで、体部の最大径が体部中ほどに位置するもの（甕Ｂ１）、直線的に外傾し、体部の最大径が体部上端に位置するもの（甕Ｂ２）に細分される。甕Ｂ１は、口縁部が判明しているものはいずれも外傾し、やや短い。また、頸部に段やくびれを持たない。器面調整は体部外面が縦位のヘラナデあるいはハケメ、内面が横位のヘラナデあるいはヘラケズリ、口縁部は内外ともヨコナデである。甕Ｂ２は、体部と口縁部との境にくびれをもち、口縁部は厚めで強く外傾する。器面調整は体部外面が縦位のヘラケズリ、内面が横位のヘラナデ、口縁部は内外ともヨコナデである。

甕Ｃ：平底で、体部はやや外傾しつつ立ち上がる。口縁部は強く外反する。器面調整はロクロナデの後、外面下半に縦位のヘラケズリ、内面中ほどに横位のヘラナデを施す。底面はヘラケズリである。

〔台付甕〕１点のみ出土している。台下部を欠損しているが、体部は球状で最大径が体部中間よりやや上部にある。口縁部は基部がほぼ直立し、上半は外反する。器面調整は体部が内外ともハケメ、口縁部が内外ともヨコナデである。

〔甑〕１点のみ出土している。単孔式で、体部は内湾しつつ立ち上がり、やや深い。口縁部は折り返し口縁で、折り返しの外面にユビオサエ痕が並ぶ。

○須恵器

〔坏〕１点のみ出土している。底径が大きく、体部は直線的に外傾する。器面調整は体部は内外ともロクロナデ、底面は手持ちヘラケズリである。切り離し手法は不明である。

〔甕〕１点のみ出土している。底部～体部下半のみ残存しており、器面調整は外面が平行タタキ、内面は下部にヘラナデが施される以外不明である。

２　土器群の設定と編年的位置

表１は、各分類の住居毎の遺物数である。出土遺物の絶対数が少なく器種構成などを分析することが困難な住居が多いが、坏の出土状況に着目すると、第３・６号住居跡では坏Ａ１が出土しているのに対して、第１１・１４号住居跡では坏Ｂ１が出土しており、様相に違い

が見られる。以下、この相違点によって２つの土器群を設定し、各土器群の編年的位置を検討していくことにする。

種　別	土師器																					須恵器	
器種	坏						高坏	鉢	椀	器台		壺			甕					台付甕	甑	坏	甕
分類	坏A1	坏A2	坏A3	坏B1	坏B2a	坏B2b				器台A	器台B	壺A	壺B1	壺B2	甕A1	甕A2	甕B1	甕B2	甕C				
3　住	2	1	1				1		1	1	4	4	1		2						1		
5　住														1									
6　住	1									1										1			
11住				2	1			2								2	4	1				1	
14住				2	1												1						
15住																			1				1
17住						1		1															

表１　住居毎の出土遺物数

第１群：坏Ａ１を伴う住居（第３・６号住居跡）の遺物によって構成

器種構成＝坏Ａ１，Ａ２，Ａ３・高坏・椀・器台Ａ，Ｂ・壺Ａ，Ｂ１，Ｂ２・甕Ａ１・台付甕・甑

第２群：坏Ｂ１を伴う住居（第１１・１４号住居跡）の遺物によって構成

器種構成＝坏Ｂ１，Ｂ２ａ・鉢・甕Ａ２，Ｂ１，Ｂ２・須恵器坏

第１群土器は、器種構成や形態的特徴から古墳時代前期の塩釜式に位置付けられるものと考えられる。

県内の塩釜式期の土器編年については、近年の遺物数の増加に伴って細分化が図られている。ここでは、辻秀人氏によって提示された編年案（辻：１９９４・１９９５）との対比を行う。

辻氏の編年案は東北地方南部の古墳出現時期の土師器について編年を試みたもので、該期をⅠ～Ⅲ期に大別し、さらにⅠ期をⅠ－１～２に、Ⅱ期をⅡ－１～２に、Ⅲ期をⅢ－１～４に細分した上で、いわゆる塩釜式に該当するのはⅡ期及びⅢ期であるとしている。さらにⅡ期においては多様な形態の小型鉢（本報告書では「坏」という名称を用いている）と小型器台とが比較的ゆるやかな共伴関係を保っている状態であるのに対して、Ⅲ期においては定形化した小型丸底鉢（辻氏編年案における器形分類「鉢Ｇ」にあたり、その特徴は「丸底で、体部が半球状で、体部と口縁部との境となる段が器高の中間より下に位置しており、その底部、あるいは体部の形状から小型器台に乗せることを前提に製作された鉢」である）と小型器台とが密な共伴関係を示すという点に両期の画期を求めている。

本土器群の坏及び器台に着目すると、坏Ａ１・坏Ａ３は大橋遺跡第３号住居跡（宮城県教育委員会：１９８０）にその類例が見られ、辻氏編年案における器形分類では「鉢Ａ」にあたる。器台Ａは藤田新田遺跡ＳＤ１１５（宮城県教育委員会：１９９４）に、器台Ｂは野田山遺跡第４号住居跡（宮城県教育委員会：１９９２）に類例が見られる。器台Ａ及びＢはいずれも辻氏の分類の「器台Ｄ１」に該当するものである。それぞれの類型の編年的位置は、「鉢Ａ」がⅡ期からⅢ－１期にかけて見られる器形、「器台Ｄ１」がⅠ期のある時期からⅢ期まで存続する器形であるとしている。「器台Ｄ１」は変化に富んだ細部形態の器台を包括した類型であるが、全体的な傾向として時期の下降に伴い脚部の縮小・透孔数の減少・器面調整の簡略化などが生じる点が指摘されており、特に透孔数は、Ⅱ期では６個や４個などが多く見られるが、Ⅲ期では３個が一般的でⅢ－３期には透孔が消失したものが現れ、Ⅲ－４期には透孔の無いものが一般化するとしている。これらの点を考慮すると、本土器群の器台Ａは器台Ｂより古式を呈する形態であり、器台ＡはⅡ期に、器台ＢはⅢ－３期に位置付けられるものと考えられる。ところで、本土器群には「定型化した小型丸底鉢」が見られない。この器形はⅡ期とⅢ期とを区別する重要な指標であり、これが見られないということから本土器群の編年的位置はⅢ期まで下降することはないと考えられる。一方、器台Ｂは上記のとおりⅢ－３期に位置付けられるのが適当な形態であり、個々の器種の形態的特徴だけを考慮すると、異なる２時期のものが共存することとなる。最初に述べたとおり器種構成に欠落が生じている可能性は否定しきれないが、未だ定形化した小型丸底鉢を伴わず、多様な形態の坏（鉢）を使用している一方で、器台は新しい時期の形態となりつつあることから、本土器群はⅡ期とⅢ期の過渡期に位置付けられるものと考えられる。

第２群土器は、器種構成や形態的特徴から栗囲式～国分寺下層式に位置付けられるものと考えられる。土師器坏に着目すると、坏Ｂ１は塩沢北遺跡第２群土器（宮城県教育委員会：１９８０）、八幡・大嶺八幡遺跡第２群土器（宮城県教育委員会：１９９１）に、また坏Ｂ２ａは八幡・大嶺八幡遺跡第１群土器（宮城県教育委員会：１９９１）に、それぞれ類例が見られる。本土器群の坏を塩沢北遺跡第２群土器及び大嶺八幡遺跡第２群土器の坏とを比較すると、表２のようにまとめられる。

	本遺跡第２群土器	塩沢北遺跡第２土器群	八幡・大嶺八幡遺跡第２土器群
体部外面の段	有段・無段が混在	全て有段	有段・無段が混在
外面に対応した内面の段	無　段	無段が主体的・一部有段	無段
有段の坏の底部形状	平底風の丸底	丸底が主体的・一部丸底風の平底	平底
無段の坏の底部形状	平底風の丸底	—	平底

表２　各土器群の坏の比較

該期の土師器坏は、時期の下降に伴って無段平底のものが増加する傾向が指摘されている。

この点に着目すると、塩沢北遺跡第２群土器では無段平底のものが見られないことから本土器群より古い時期のものと考えられる。また八幡・大嶺八幡遺跡第２群土器では無段の坏は全て平底であることから、本土器群より新しい時期のものと考えられる。それぞれの土器群の実年代は塩沢北遺跡第２群土器は７世紀中頃～後葉、八幡・大嶺八幡遺跡第２群土器は８世紀後半と考えられていることから、本土器群は７世紀末～８世紀前半に位置付けられると考えられる。

第２節　竪穴住居跡の考察

ここでは検出された住居跡の機能時期を推定するとともに、各住居跡の軸線方向について考えることとする。

１　各住居跡の機能時期

第１節において導き出されたとおり、第１群土器は塩釜式期で辻氏編年のⅡ期～Ⅲ期の過渡期、また、第２群土器は栗囲式期～国分寺下層式期、実年代では７世紀末～８世紀前半と位置付けることができた。これを元に各遺構の機能時期を推定する。

第３号住居跡は第１群土器のほとんど全ての器種構成を含んでいることから、その機能時期は第１群土器の編年的位置と同様、塩釜式期のⅡ期～Ⅲ期の過渡期と考えられる。また、第６号竪穴住居の遺物は量的には少ないものの、いずれも塩釜式期でもⅡ期の範疇でとらえることができるので、その編年的位置が機能時期と考えられる。

第１１号住居跡は第２群土器の全ての器種構成を含んでいることから、この機能時期は第２群土器の編年的位置と同じ栗囲式期～国分寺下層式期、実年代では７世紀末～８世紀前半と考えられる。また、第１４号住居跡も同様な遺物の様相を呈することから、その機能時期も同時期と考えられる。

これら４軒の他に遺物を伴うのは第５・１５・１７号住居跡であるが、遺物量が少なく各土器群と遺物の形態が異なることから比較はできない。ここでは、個々の遺物を検討することによってその機能時期をおおまかに推定する。

第５号住居跡に伴う遺物は壺Ａ２が１点のみである。壺Ａ２は南小泉遺跡第９号住居跡（仙台市教育委員会：１９９０）に類例が見られ、古墳時代中期の南小泉式期のものと考えられる。よって本住居跡の機能時期も古墳時代中期、南小泉式期と推定される。

第１５号住居跡に伴う遺物は土師器甕Ｃ及び須恵器甕Ａが１点づつである。土師器甕Ｃは南小泉遺跡第１８号住居跡（仙台市教育委員会：１９９４）に類例が見られ、表杉の入式期のものと考えられる。よって本住居の機能時期も表杉の入式期と推定される。

第１７号住居跡に伴う遺物は坏Ｂ２ｂ及び鉢が１点づつである。いずれも清水遺跡第Ⅶ群土器に類例が見られ、国分寺下層式と考えられる。しかしこの２点の遺物のうち坏の形態は

国分寺下層式期を中心とした前後の時期に普遍的に見られるもので、これらの遺物をもって時期決定をすることはできない。ゆえに本住居跡の機能時期はおおまかに国分寺下層式を中心とした時期ととらえておきたい。

以上、出土遺物の特徴からその機能時期の推定が可能だった７軒の住居跡について、それぞれの住居跡を時期ごとにまとめると以下のようになる。

塩釜式期・・・・・・・・・・・・・・２軒（第３・６号住居跡）

南小泉式期・・・・・・・・・・・・・１軒（第５号住居跡）

栗囲式期～国分寺下層式期・・・・・２軒（第１１・１４号住居跡）

国分寺下層式を中心とした時期・・・１軒（第１７号住居跡）

表杉の入式期・・・・・・・・・・・・１軒（第１５号住居跡）

その他、第４・１６号住居跡は遺物が伴わないものの、重複する遺構の機能時期が推定できたことから、ある程度その機能時期を類推することができる。

第４号住居跡は第５・第６号住居跡と重複し、これらの中で最も新しい。第６号住居跡は塩釜式期、第５号住居跡は南小泉式期であるため、本住居跡はそれ以降の時期の遺構であることが類推できる。

第１６号住居跡は第１７号住居跡と重複しこれより古い。第１７号住居跡は国分寺下層式を中心とした時期であるため、本住居跡はそれ以前の時期の遺構であることが類推できる。

第６号住居跡（塩釜式期）→第５号住居跡（南小泉式期）→第４号住居跡（それ以降）

第１６号住居跡（それ以前）→第１７号住居跡（国分寺下層式期）

また、第１・２号住居跡及び第１０・１２号住居跡はそれぞれ重複しているが、いずれも機能時期を推定できなかったため、ただ前後関係のみが判明しているに過ぎない。

第２号住居跡（古）→第１号住居跡（新）

第１０号住居跡（古）→第１２号住居跡（新）

２　住居跡の軸線方向

カマドを有する住居跡はカマド軸線を、それ以外の住居跡は南北方向に最も平行に近い壁の向きを基調として住居の方向を求めたところ、以下のようなグループに分けられた。

Ａ，真北方向を向くもの・・・７軒（第４・８・１１・１２・１５・１６・１７号住居跡）

Ｂ，北北西方向を向くもの・・３軒（第１・２・１４号住居跡）

Ｃ，北西方向を向くもの・・・２軒（第３・６号住居跡）

Ｄ，北微東方向を向くもの・・３軒（第５・９・１０号住居跡）

Ｅ，西北西方向を向くもの・・２軒（第７・１３号住居跡）

遺跡の立地は緩やかな東斜面上で、調査区は南北方向に細長い形状をしており、標高はほ

ぼ同一だが、南側では徐々に標高を減じる。遺構は南側の低地を除いて遍りなく検出されている。また、ごく近くに位置する遺構同士の軸線が異なる場合もあるため、これらのまとまりは地形のみを考慮した結果とは考えにくい。表２は、住居の方向と機能時期との対応を示したものである。時期不明のものが多いため断定はできないものの、機能時期と住居方向との間にはある程度の関係が見出せるものと考えられる。まとめると以下のようになる。

	塩釜式期	南小泉式期	栗囲～国分寺下層式期	国分寺下層式期	表杉の入式期	不明
真　北			1(1)	1(1)	1	5(2)
北北西			1(1)			2
北　西	2					
北微東		1				2
西北西						2(1)

表３　住居方向と機能時期　（　）はカマドを有する住居、内数

塩釜式期・・・・・北西方向

南小泉式期・・・・北微東方向

栗囲式期以降・・・真北、北北西方向

また、カマドを有する住居跡は１軒を除いて全てが真北及び北北西方向を向いているが、これは地形や風向きなどをはじめとした諸条件を考慮した上で、この方向にカマドを設けるのが最適とされたためと考えられる。なお、本調査において検出された住居跡のうちカマド軸線が西北西を向いたものは第１３号住居跡のみだが、本調査区の至近地で１９８９年度に行われた発掘調査において検出された第２・３号住居跡（蔵王町教育委員会：１９８９）のカマド軸線方向が西北西であり、第１３号住居跡のそれと同一方向である。このことから、堀の内遺跡において本住居跡がとるカマド軸線が特殊なものでないということがわかる。

ま　と　め

1．堀の内遺跡は円田盆地南西部の高木丘陵東麓部の東斜面に位置しており、標高は約１００ｍ、盆地底部との比高は約２０ｍである。

2．今回、遺跡のほぼ中央を南北に縦断する形で約１，０００㎡を発掘調査したところ、竪穴住居跡１７軒が検出された。

3．検出された竪穴住居の機能時期は、塩釜式期のものが２軒、南小泉式期のものが１軒、栗囲式期～国分寺下層式期のものが２軒、国分寺下層式期を中心とした時期のものが１軒、表杉の入式期のものが１軒、不明のものが１０軒であった。

4．遺構の内外から出土した遺物によって、本遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代と非常に長期間にわたって人の生活の痕跡が残されていることがわかった。

5．遺構に伴うものではないが、続縄文土器（後北Ｃ２－Ｄ式）の破片が出土した。器形は不明である。

6．今回の調査によって、本遺跡は丘陵麓部の斜面上に帯状に築かれた集落であること、各時代で住居の分布にほとんど偏りがないことがわかった。

引用・参考文献

小川淳一(1980):「塩沢北遺跡　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書第69集』

太田昭夫(1980):「大橋遺跡　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書第71集』

丹羽 茂 他(1981):「清水遺跡　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書第77集』

菊地逸夫(1989):「堀ノ内遺跡」『蔵王町文化財調査報告書』

佐藤　洋(1990):「南小泉遺跡　第16～18次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第140集』

小村田達也(1991):「八幡・大嶺八幡遺跡　合戦原遺跡ほか」『宮城県文化財調査報告書第140集』

吾妻俊典・須田良平(1992):「野田山遺跡」『宮城県文化財調査報告書第145集』

斎野裕彦(1994):「南小泉遺跡　第22・23次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第192集』

後藤秀一・村田晃一(1994):「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第163集』

加藤道男(1989):「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』

弥生時代研究会(1990):「天王山式期をめぐっての検討会　記録集」

辻　秀人(1994):「東北南部における古墳出現期の土器編年　その1　会津盆地」
『東北学院大学論集　歴史学・地理学第26号』

辻　秀人(1995):「東北南部における古墳出現期の土器編年　その2」
『東北学院大学論集　歴史学・地理学第27号』

写　真　図　版

A区・B区全景

C区全景

写 真 図 版 1

D区全景

第１号・２号竪穴住居跡

写 真 図 版 2

第3号竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡
床面遺物出土状況

第3号竪穴住居跡
貯蔵穴付近遺物出土状況

写 真 図 版 3

第4・6号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡

第7・8号竪穴住居跡

写 真 図 版 4

第9号竪穴住居跡

第10号竪穴住居跡

第11号竪穴住居跡

写 真 図 版 5

第11号竪穴住居跡
カマド

第12号竪穴住居跡

第13号竪穴住居跡

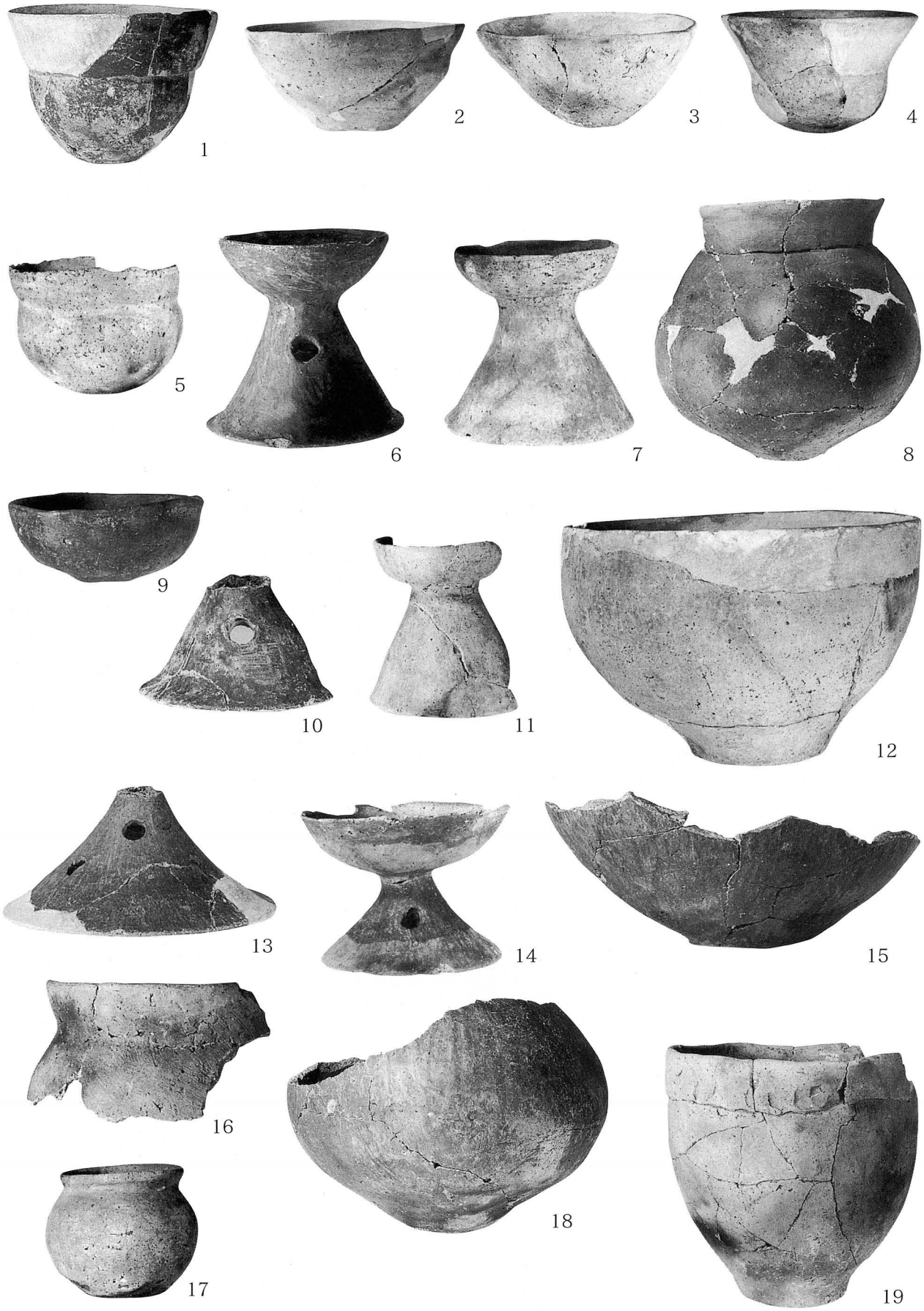
写 真 図 版 6

第14号竪穴住居跡

第15号竪穴住居跡

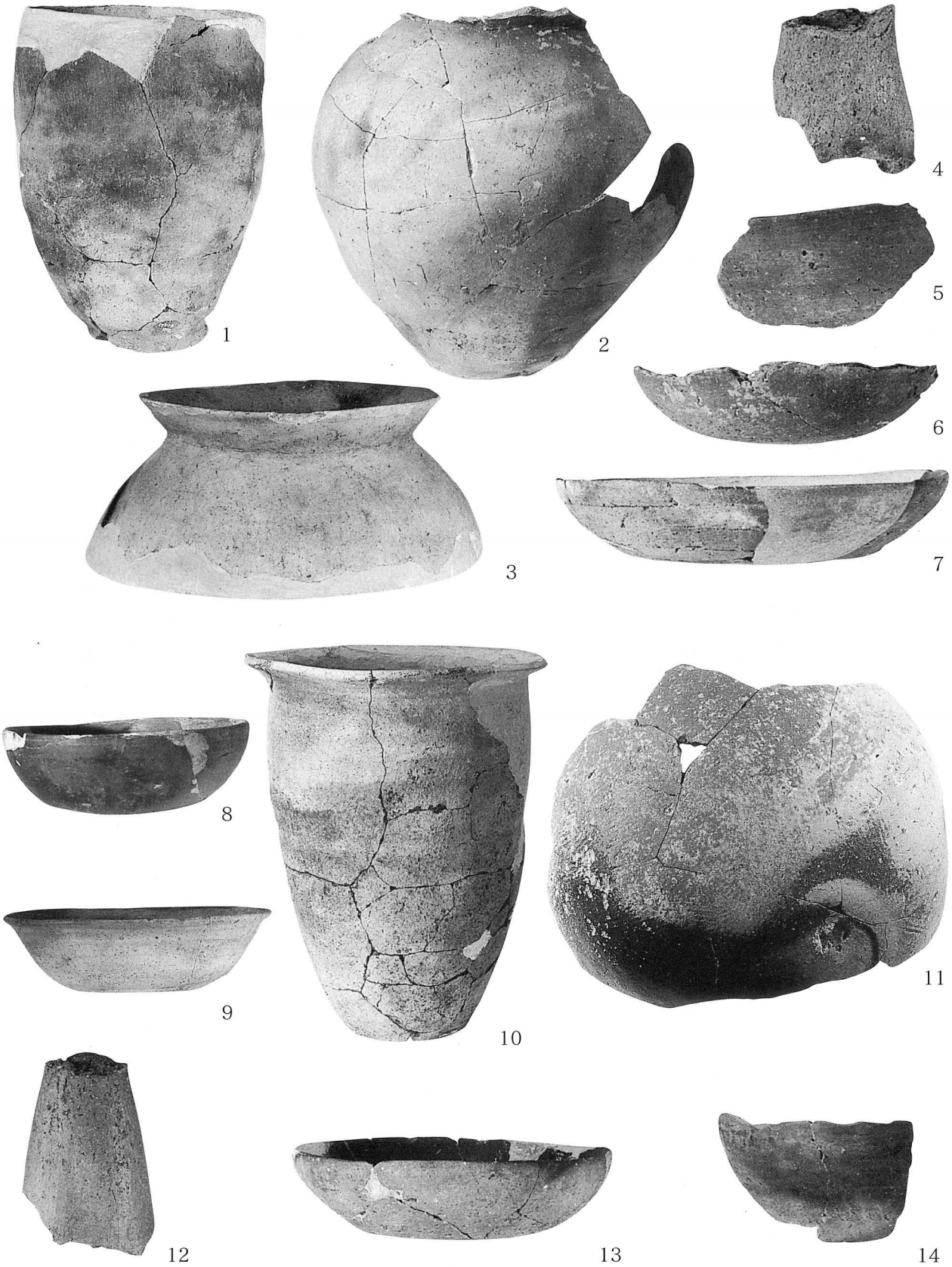
第16・17号竪穴住居跡

写 真 図 版 7



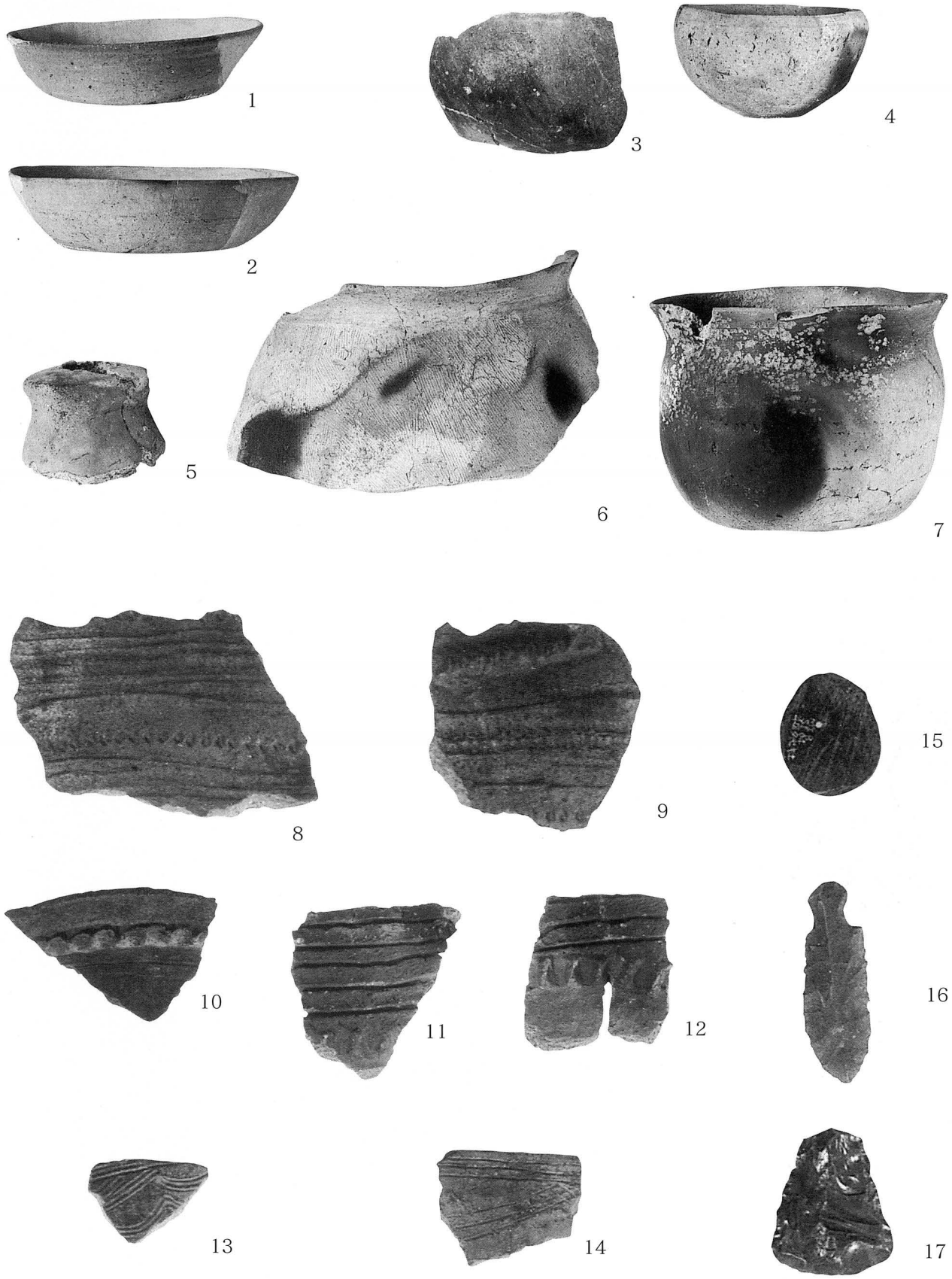
写真図版8　第３号竪穴住居跡出土遺物

写真図版9　第4・6・11号竪穴住居跡出土遺物
1・2……4住　　3・4……6住
5～15……11住



写真図版10　第11・14・15・16・17号竪穴住居跡出土遺物

1～3……11住　　4～7……14住
8～11…… 15住　　12……16住
13・14…… 17住



写真図版11　その他の出土遺物

蔵王町文化財調査報告書第１集

堀の内遺跡

平成9年3月31日発行

発　行　蔵王町教育員会
宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10
〒989-0892　TEL (0224) 33-3007

印　刷　株式会社 津田印刷
柴田郡大河原町字東原町13-5
TEL (0224) 52-5550